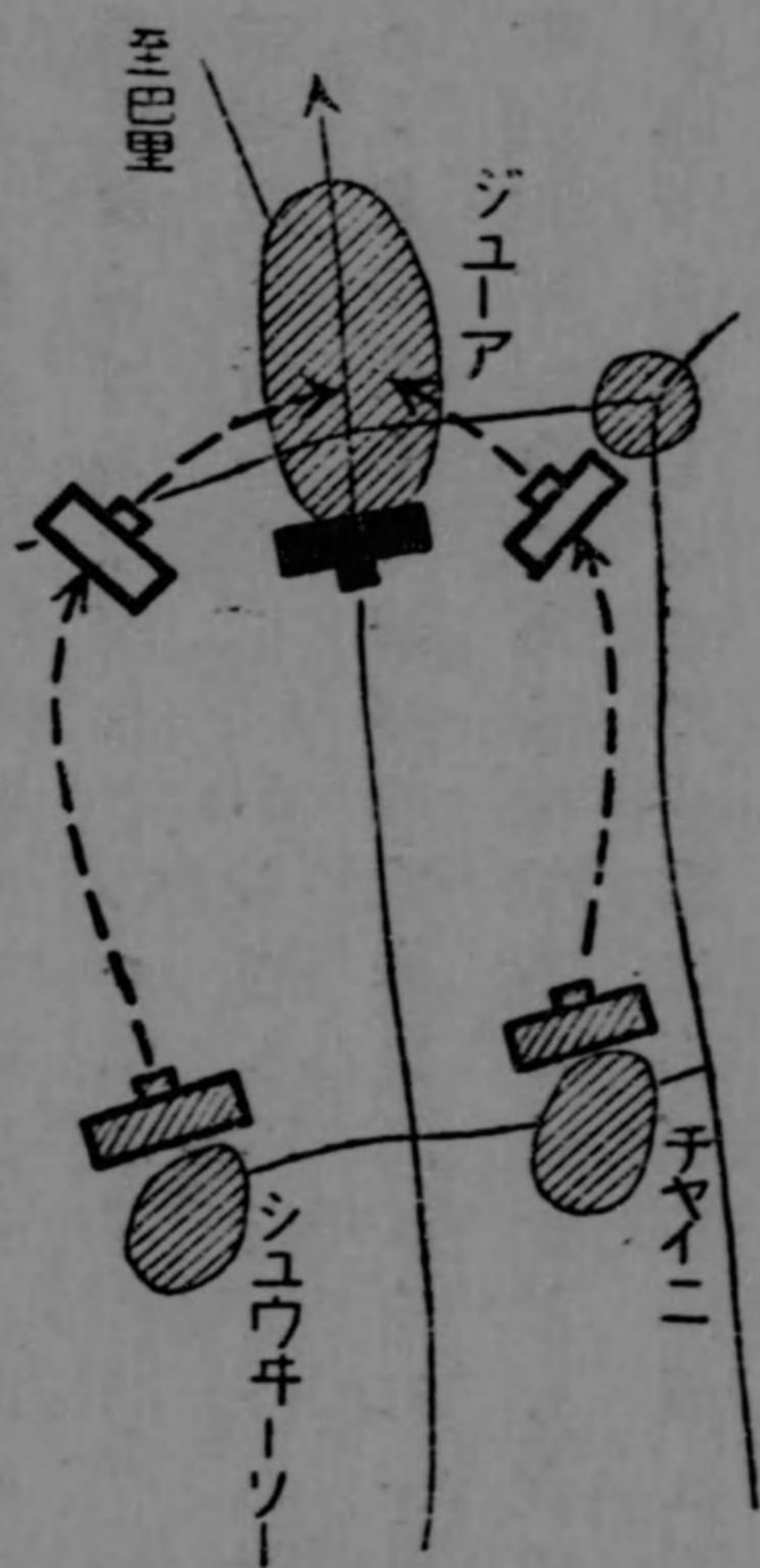


べきである。

千八百七十年獨軍が巴里を攻圍せしとき、佛軍の一部隊は巴里の近傍なる「ジュニア」村に屯在して居つたのである。當時獨軍の一大隊は「チャイニ」他の一大隊は「シユウキーソー」に在つたが佛蘭西軍を撃退する爲、敵を挾撃せむと欲し、夜間東西から時を期して出發したのである。此の夜月無く天又曇つて居つたが兩大隊は幾多の困難を排して「ジュニア」村の東方及西方に達し、一舉以て佛軍を殲滅せむと欲し、各靜肅に村落に接近し銃劍を提げ村落内に突入し、彼我



激戦を交ゆること稍、久しく著しく死傷者を發生したのである。既にして天明け彼我識別し得るに至るといふと、始めて佛軍は前夜既に茲を去つて現在せず、反つて友軍相搏ちたるを知り相顧みて疎然たるものがあつたのである。

又日露戦争の沙河會戦に於ける第十師團の三塊石山の夜襲に於ては、師團長は包

圍を企圖したのではないけれども、各部隊長の獨斷と著明なる地物に牽制せられたので、期せずして包圍の形勢を誘致したのである。各級指揮官は友軍相搏つたの危害を免るる爲、或は喇叭を吹奏し、或は停止して状況を確認する等、前進に至大の困難を感じたばかりでなく、狭地域に大部隊を蟄集した結果指揮の紛亂と部隊の混淆とを來し、隊伍を集結するのに翌日一日を費すに至つたのである。此の原因は包圍攻撃的になつたことのみではないのであるけれども、少くも其の有力なるものの一つに數へることが出来るのである。

次に軍隊をして攻撃地區の地形及敵陣地の状態に通曉することは奏功の爲に必要缺くべからざる要件なのである。蓋し各級指揮官が以上の諸件を暗識して居る程度でなければ不慮の状況に際會して、奏功の途を開拓することが困難であるからである。又準備を周到ならしむることも攻撃奏功の爲必要缺くべからざる要件である。弓張峯の夜襲に於ては約二週間に亙つて準備し此の間上下の各指揮官は敵情、地形を搜索し、敵の警戒線を瀆過して其の中に侵進し、以て細密に地形を暗識したから、困難なる地形に於て而かも大部隊を以て夜襲を行ふたに拘らず混雜なく實施し以て大なる成功を收めることが出来たのである。

第四百十九 夜間攻撃ヲ實施スベキ時刻ハ一般ノ狀況特ニ我が軍ノ目的ニ依リ變化スルモ克ク敵ノ狀態ヲ洞察シ警戒ノ虛ニ乗ジ得ル如ク選定スルコト緊要ナリ而シテ夜ニ入ルト共ニ直チニ之ヲ開始スルトキハ往々敵ノ夜間行動ノ機先ヲ制シ得ベク又黎明ニ近ク之ヲ行フトキハ其ノ效果ヲ直チニ利用シテ攻撃ノ成果ヲ著大ナラシメ得ルコトアリ

本條は夜間攻撃の實施時刻の選定に關する原則を記述せられたのである。夜間攻撃の成否は之が時刻選定の適否に係るところ實に多大なものがあるのである。而して之が時刻の選定は敵の警戒の虚に乗ずるに在ることを明にせられたのである。然り而して此の警戒の虚に乗ずることは、敵の警戒部隊の間隙等に乗ずるといふ様な狭義の意味でなく、即ち一般的に敵の警戒心の弛緩せる虚に乗ずる意であるから誤解なきを要するのである。而して夜に入りて直ちに之を開始するを可とするや、黎明近く之を行ふべきやは、全く當時の狀況特に我が企圖及敵情に依つて異なるものである。以下之に關し若干戰史的に考察すれば次の如くである。

日没と共に行ふ夜間攻撃は夜に入るも晝間の戦闘を繼續せる場合に生起したことが多いのである。遼陽會戰の後期第二師團の太子河右岸黒英臺の高地に對する夜間攻撃は其の一例である。而して此の攻撃は晝間攻撃を爲さんとするも敵火猛烈であつて、遂に之を實行することが出来ないから、日没を待ち全砲兵を以て約一時間猛烈に黒英臺の高地を砲撃し、此の間歩兵は逐次前進し砲撃の止むを待つて敵陣地に突入したのである。其の砲撃の實施に方つては晝間既に敵陣地を射撃した爲、表尺其他總ての諸元を決定して居つたから、夜に入るも射撃を繼續すること容易であつて、我が曳火彈の炸烈する際の火光は全高地を照明し、晝間よりも却て破烈點の修正容易であつたのである。此の砲撃は敵の守兵を動亂せしめ、其の志氣を挫き我が歩兵の志氣を鼓舞し、行進目標を指示するの利益があつたのである。之に反し敵砲兵は我が攻撃歩兵の移動する爲之を射撃することが出来ず、我が歩兵には砲兵の協力あるも、敵には之を缺いて居つたのである。是我の敵より有利なりし點であつたけれども、此の種の夜間攻撃は所謂純然たる強襲であつて、假令敵に我が企圖を察知せらるるも、他に此の害を償ひ得べき利益ある場合に行ふを可とするのであつて、此の攻撃は將來益、獎勵すべきであること後述の如くである。

此の攻撃時刻の利とするところは、敵陣地占領後之を確實にする爲、夜間工事を行ふの時間を得ることにあるのである。黒英臺の高地に於ても翌日敵の猛烈なる

砲撃を蒙つたけれども、前夜既に之に對する工事を行つた爲、確實に占領地
區を守備することが出来たのである。又此の攻撃時刻は軍隊が活動状態から靜
止状態に轉ずる時機に於て、敵が晝間配備より夜間配備に未だ移り得ざるの時機
に投ずるの利あるのである。特に將來戰に於ては戰鬪の經過長く、従つて此の時
期に於ける攻撃の多々惹起すべきは必然であつて、現に日露戰役中晝間の戰鬪に
於て彼我近く相對せし際、黄昏に至れば敵陣地の後方所々に炊烟の昇るを認め
といふから、此の際敵が第一線の兵力を後方に退けて居つたことは明かだ、我が軍
に於ても夕刻より攻撃を再興せむとし之を督促した際其の第一線の戰鬪員を多
く後方に退け炊爨中なりし爲、直ちに攻撃を再興する能はざりしことがあつたの
である。黄昏時に於ける軍隊の状況斯くの如くであるから、此の時期は夜襲實施
の好機であつて晝間戰鬪を決することが出来ないときは、此の時機を待ちて攻撃
を行ふのを得策とすることが屢なのである。

遼陽會戰の初期(八月二十八日)第二師團歩兵第三旅團の、房身溝西方高地に對する
夜間攻撃は此の一例である。當該旅團は晝間孫家寨附近の敵を擊攘し、續いて之
を追撃し、敵の守備未だ十分ならざるに乘じ、地形上の要點たる最高地を占領する

爲日没後直ちに攻撃を行つたものであつて有利に奏功したのである。

併しながら此の時期に行ふ攻撃は奏功後の整頓は混雜を生ずるを免れないから、
單に晝間奪取し得ざりし敵陣地の奪略に満足し、爾後の發展は翌朝に於て爲すを
要するのであつて、従つて敵陣地占領後の時間には之が準備に用ふべきである。

本條には夜半の攻撃に就て記述せられてないけれども、此の戰例が少くないから
若干述べやうと思ふ。夜半は敵の警戒最も弛緩すべき時であつて、殊に連日戰鬪
を繼續しある時に於て然りとする。故に敵の不意に乘じ得ることが多いのであ
る。然れども奏功後の警備も亦困難なることを覺悟しなければならぬのである。
既述の如く三塊石山に於ける第十師團は、晝間の攻撃に方り敵の頑強なる抵
抗を受け、且地形平坦開豁であつて、前進頗る容易である爲、夜間攻撃を決行したの
である。此の攻撃に於て殆んど全師團は彼我の射撃に誘致せられ悉く一の三塊
石山に蟄集して隊伍混亂し、爲に同山を占領せし後、隊伍の整頓に約一日間を要し、
追撃の功を收むることが出来なかつたのである。此の間暗黒の爲諸隊は往々行
進方向を誤り、或は連絡を失し、過早に射撃を開始し、或は三塊石山と誤認し之を目
標として突進すれば小森林なりし等種々の錯誤を生じ、又他の方向に向ふべき一

旅團は三塊石山方向の銃聲を聞いて之に赴援し、豫備隊たる後備旅團も亦此の渦中に投じたのである。又前進途中大凹地に陥り之を出でんとするも、周囲は斷崖多き爲出ることが出来なかつた。此等の錯誤は當時の状況を推察して餘りあるであらう。當時該師團は前日夕迄攻撃を繼續し師團の第一線は敵陣地前約二千米以内の距離に在つたけれども、其の攻撃實行後の景況斯くの如くである。殊に奏功後の整備に一日を要せし點から考ふれば、夜半に行ふ攻撃は此の點に關し注意を要すること益大なるを教示するのである。

其の他折木城附近の戦闘に於ける第五師團歩兵第二十一及第四十一聯隊は晝間の攻撃を容易ならしむる爲敵陣地の要點而かも守備薄弱なる所に向ひ、夜半敵の不意に乗じて攻撃を實行し、第二十一聯隊は頗る有利に奏功し、第四十一聯隊は途中不時の事變の爲奏功せず、且軍司令官より攻撃の督促を受け、夜半敵の退却の状態を見一舉攻撃を行ひ有利に奏功したのである。遼陽會戦の中期第一軍の梅澤旅團は太子河を渡り、威寧城附近の敵兵大ならず、且騎兵を主とせる部隊であるのを知り、敵兵河を恃みて警戒を怠りたるに乗じ、不意に出で夜半攻撃し有利に成功したのである。

要するに夜半に行ふ攻撃は敵の不意に出づることが出来るけれども、又成功後の整頓に就き深甚の注意を要するのである。

次は拂曉近くに行つたものに就て觀察しやう。遼陽會戦の初期第一軍の第二、第十二師團は既述の如く弓張峯及大寒坡峯附近の陣地に對し地形上晝間の攻撃甚だ困難であつて、且山地なる爲に有利に我が砲兵を使用し能はざるに依り、夜間攻撃を實施し拂曉前敵陣地に突入し、若干敵に追撃を加ふるの利を收め得たのである。是拂曉前に於て行ふ攻撃の利益である。又楡樹林子附近の戦闘に於て第十師團の右翼隊は、拂曉前敵陣地の左翼福家堡子北方鞍部に向ひ攻撃し、頗る有利に奏功したのである。然れども此の種の攻撃は天明に及ぶも尙敵陣地を奪取し得ないときは、往々敵の猛烈なる集中火を蒙り、危険に陥ることがあるのである。前述弓張峯及大寒坡峯附近の夜間攻撃に於て、第二師團の左翼方面に於て岩山に對せし部隊は、天明迄之を奪取すること能はず、爲に天明と共に敵の猛烈なる瞰制射撃を受け、頗る苦戦に陥り多數の死傷者を生じたのである。是天明と共に射撃の效力大となるに至るのであるから、急轉直下状況の變化を來すことあるを豫め覺悟しなければならぬ一例であらう。又此の種の實例を露軍に就て求めんに、

沙河會戰に於て我が第十二師團の大峯方面の戦闘に方り、露軍は十月十一日夜大峯前面の軍旗山に夜間攻撃し、之を占領することを得たけれども、拂曉後我が軍砲兵の十字火を受け、大敗に陥り多大の損害を蒙つて潰走するに至つたのである。特に露軍は軍旗山に比較的大なる兵力を集中したから、拂曉以後の保持の爲には却て不利を招いたのである。

由是觀之天明に近く行ふ攻撃は奏功後の追撃容易で、且夜暗の爲蒙るべき混雜は幾もなく除去せらるるから、大部隊を以てする夜間攻撃の時機として特に選定すべきであるけれども、天明後に於ける敵の集中射撃及大規模の逆襲若くは攻勢移轉を顧慮しなければならぬのである。

之を要するに夜間攻撃の各時期に於ける利害を稽へ、其の害を減少し、其の利に就く様に之が決行の時機を状況に適合せしめる必要があるのである。固より敵情、我が軍の目的及友軍との關係上所望の時期を選ぶことが出来ない場合もあるけれども、一般に敵陣地奪取後之に工事を設け占領地を保持し、主として拂曉後に於て後圖を爲さんと欲する如き場合には、日没に近く選定するを有利とし、敵陣地奪取後直ちに追撃を行はんとするが如き決戦の企圖を有する場合には、拂曉前に奏

功し部隊の集結及追撃の部署を終り得る如く、天明に近く選定するを可とするのである。

又敵の不意に乗せむとせば夜半特に暴風雨の夜に行ふを有利とし、單に敵を騷擾せしめむが爲には必要の期間之を行ひ、拂曉前には終結するを適當とするのである。又月明の夜は之が不利を醫するの手段ある場合に利用するを可とするのである。

本條關聯事項として獨逸軍隊指揮及佛軍大單位部隊戰術的用法教令中より關係條項を左に摘記し參考に供しやうと思ふ。

獨逸軍隊指揮第五百四十四 攻撃ノ正確ナル時機ハ勉メテ永ク之ヲ秘密ナラシムベキモノトス

敵ノ休憩ヲ妨ゲ若クハ獲得セル陣地ニ設備ヲ施ス時間ノ餘裕ヲ得ントスルカ或ハ拂曉前再ビ該陣地ヨリ撤退シ得ンガ爲夜暗ニ入ルト共ニ攻撃スルコトアリ黎明ニ近ク行フ攻撃ハ攻撃續行ノ企圖ヲ永ク秘匿シ且夜間攻撃ニ引續キ直ニ戦闘ヲ繼續シ得シムルモノトス
佛軍大單位部隊戰術的用法教令第四百四十七(一節) 夜間ノ作戰ヲ前半夜ニ開始スルトキハ後半夜ヲ攻略セル地區ノ編成ニ使用スルヲ得

之ニ反シテ後半夜ニ開始スルトキハ常ニ危險ナル敵ノ夜間ノ反撃ヲ避クルヲ得

(戰 四七)

第五百五十 夜間ノ攻撃目標ハ攻撃ノ目的ニ基キ狀況特ニ敵陣地ノ狀態等ニ應ジ選定スベキモノ

ナリト雖モ其ノ縦深ハ晝間ニ比シ通常限定セララルモノトス
 攻撃目標ヲ指示スルニハ特ニ進出スベキ地線若クハ地點ヲ明示スルコト緊要ナリ
 大部隊ノ攻撃ニ在リテハ各隊ニ特ニ明確ナル各個ノ攻撃目標ヲ指定スルヲ要ス而シテ第一線各
 部隊ノ協同動作ハ通常之ニ配當スル目標ノ選定、攻撃時刻ノ決定等ニ依リテ期シ得ル範圍ニ止ル
 モノトス

夜間の攻撃目標は攻撃の目的に基き、状況特に敵陣地の状態等に應じ選定すべきものなりと雖も、其の縦深は晝間に比し通常限定せらるるものである。
 之に關し獨佛教令の規定を紹介すれば次の如くである。

獨逸軍隊指揮第五百四十二 夜間攻撃ノ範圍ハ一般ニ之ヲ制限シ攻撃目標ヲ限定セザルベカラズ但シ追撃同志氣沮喪セル敵ニ對シテハ然ラザルコトヲ得

佛軍大單位部隊戰術的用法教令第七十七(一節) 夜間ノ作戰ハ概シテ細部ノ作戰行動ニシテ

狭小ナル正面ニ僅少ノ兵員ヲ以テ行ハレ其ノ目標モ近距離ノモノトス

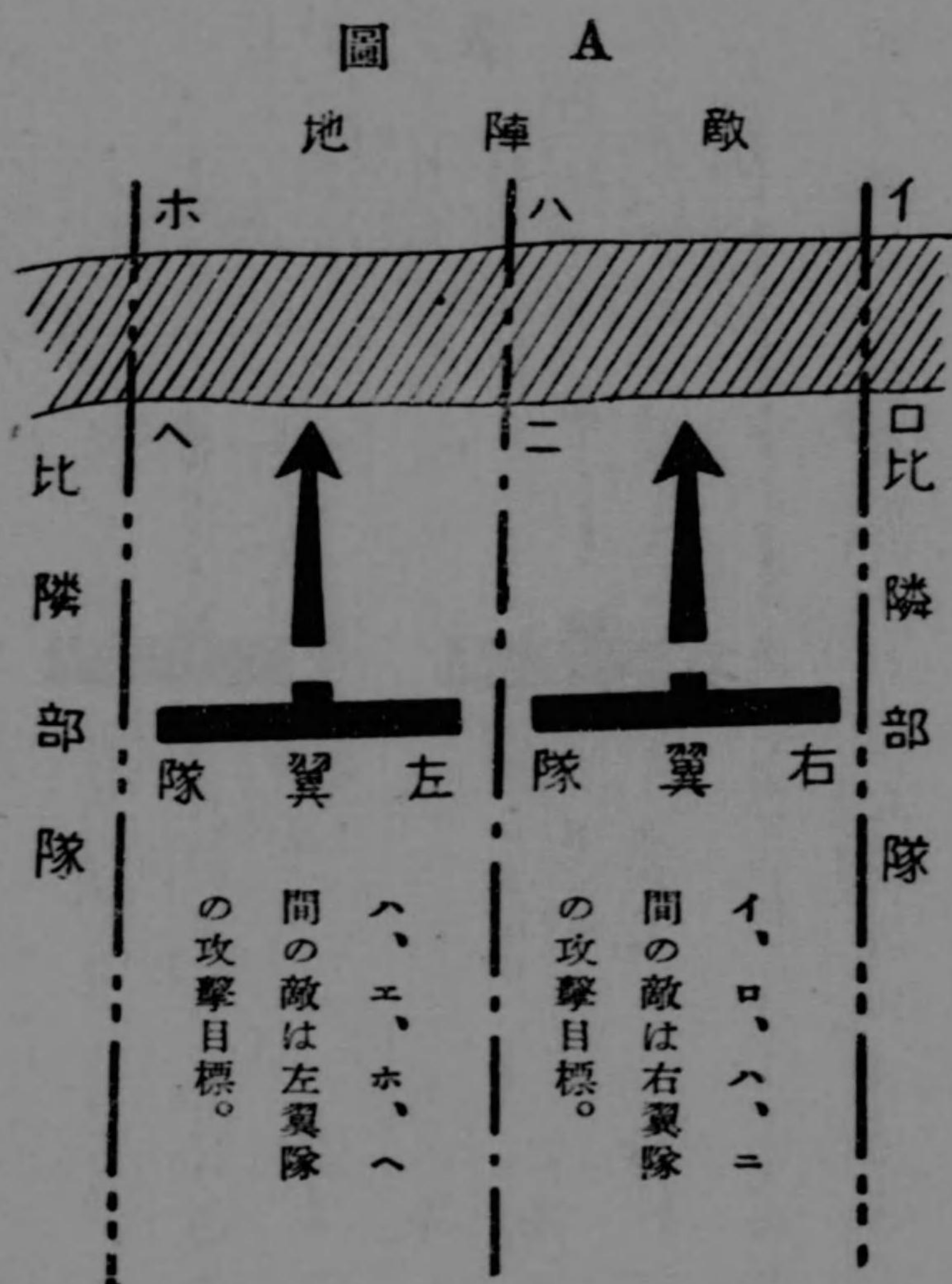
然レドモ縦深ナキ敵ノ火網ニ對シ或ハ頗ル區分セラレタル地區ニ於テハ夜間ノ攻撃モ廣正面

ニ行ハルコトアリ此ノ場合ニ於テハ我が攻撃隊ノ一ニ對スル敵ノ反撃ガ他ノ我が攻撃隊ニ影響ヲ及ボサザル爲十分離隔セル方向上ニ各別個ノ諸攻撃ヲ行フヲ適當トス

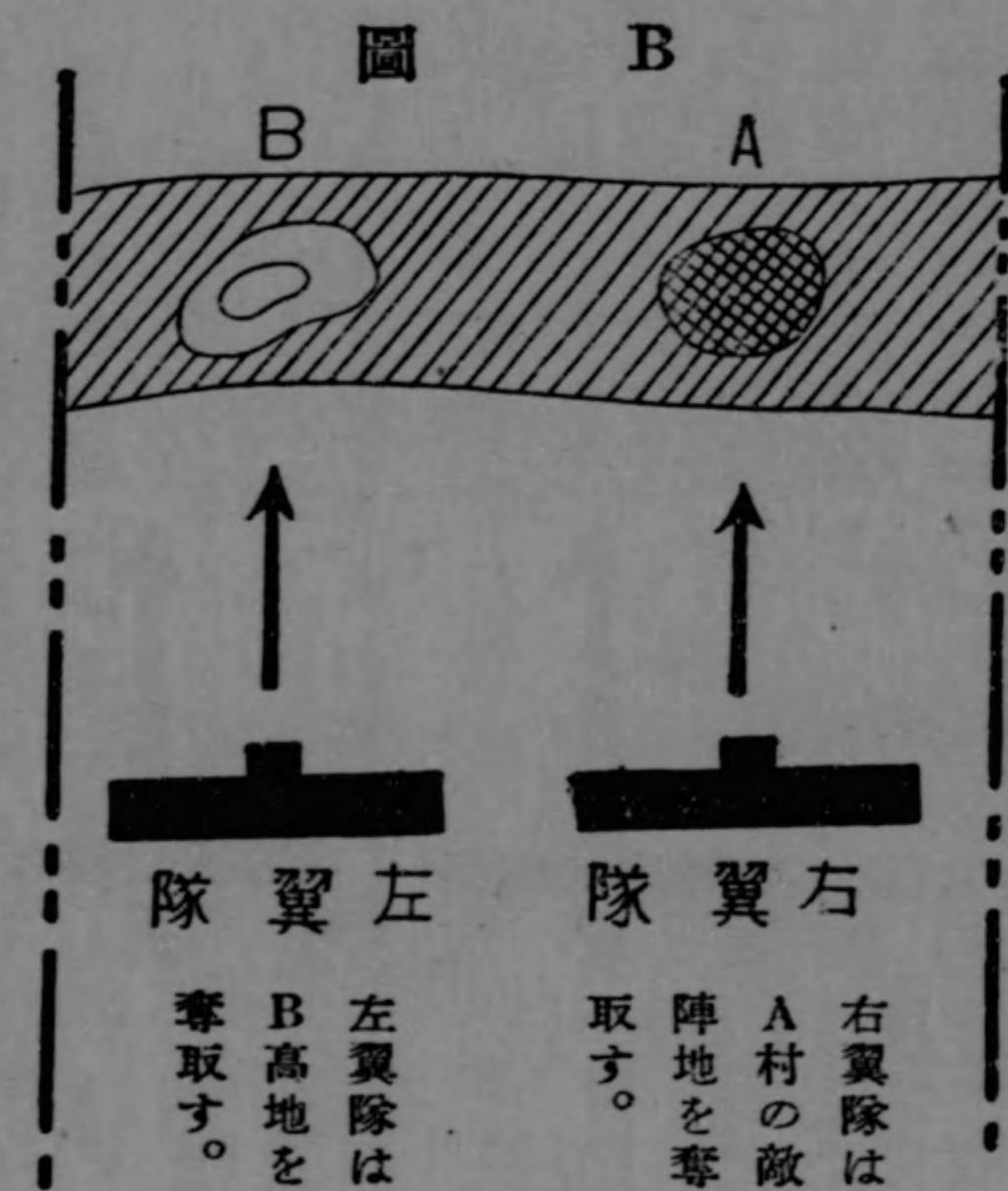
右の獨佛教令の規定も亦其の精神は本條のものと略同様であるとするべきである。故に如何に照明機關其他が發達しても現下の程度に於ては、夜間攻撃後に

於ける戦果の擴張の困難なることは明である。

第二項は第一項に關聯し新に増補せられたものであるが、攻撃目標を指示するには、特に進出すべき地線若くは地點を明示すること緊要であると示されて居る。本項は夜間に於ても縦深に互る攻撃を行ふべき必要に鑑み、其の行動を整齊ならしめんが爲特に此の要求を爲されたのである。



第三項は綱要其の儘であるが、大部隊の攻撃に於ては晝間の如く(上圖A)敵の全線を各部隊の攻撃正面に應ずる如く區劃して攻撃目標を示すのではなく、各部隊毎に奪取せしめんとする各個の目標(次圖B)を指定すべきであつて、従つて各部隊も亦各獨立して其の限定せられたる攻撃目標の奪取に任じ、相互の協同は、攻撃目標の選定、攻撃時刻の決定



奪取すれば夜間攻撃の目的を達成することが出来るのである。

明確なる各個の目標とは、結局各部隊の目標の間に相當の間隔を有することが必要であることを意味するものである。前述佛國大單位部隊戰術的用法教令第四百七十七の一節にも之と同一の趣旨を述べて居るのである。是相當の間隔なければ往々にして地形、地物若くは銃聲其他各種微細なる現象が、夜間往々冷靜を失へる心理に反映して、遂に全く方向を失し、若くは他部隊の攻撃目標に轉進せしむるに至ることあるからである。斯くの如く相離隔せる目標を各部隊に分與す

等に依つて生ずる自然の結果に應じて期し得る範圍に止むべきを明示せられたのである。

要するに夜間は大部隊が全力を以て攻撃に任ずる場合に於ても、各部隊をして連繫を保たしめて、廣き正面を以て敵正面の全部を攻撃することは、夜間に於ける特性並に兵力の關係上不可能であり、特に要點を

れば、晝間に於ては攻撃を受けざる部分の敵の火力又は出撃の爲各地點の攻撃は到底不可能となる虞があるけれども、夜間は斯る顧慮が少く、従つて各個の目標を奪取することに依つて、能く敵に穿貫的威力を及ぼし得るものである。

彼の大寒坡峯附近の攻撃に於て、我が第十二師團が廣地域に點在する諸要點に向つて各部隊をして攻撃せしめ、能く成功を得たのに徴しても、這般の消息を窺ふに足ることが出来るのである。攻撃目標の配當に方り更に吾人は注意を要すべきものがある。即ち他部隊の攻撃すべき敵若くは有力なる敵の占領しある陣地を側方にして行動する如く、某部隊の目標を與ふるが如きは、勉めて之を避け、敵の占領しある正面及其の方向に著意して如何に攻撃目標を配當し、如何に部署すべきやを慎重に考慮しなければならぬことである。若し已むを得ざる場合に於ては、特に注意を倍徒して人情の弱點より生ずる自然の過失を避くる方法を講じなければならぬのである。

彼の明治三十七年八月三十日夜歩兵第二十三聯隊が、自家爪窩以南の地區から孤家堡子に向ひ前進せむとするに方り、西螞蟻屯附近の敵より側射を受け、其の正面を該敵に對する如く漸次變換するに至りしが如き、又同年十月十一日第十師團が

三塊石山附近に於て、北大山を攻撃目標とせる右翼隊が、自ら左翼隊の向ふべき三塊石山方向に誘引せられ、大混亂を醸生したるが如き皆之を戒めて餘りがあるのである。

(一戰四八)

第一百五十一 夜間攻撃ニ在リテハ指揮官ハ精細ナル計畫ヲ定メ成ルベク晝間ニ於テ各部隊ノ指揮官ヲ集メ之ニ命令ヲ下シ以テ諸準備ヲ爲サシムベシ此ノ命令ニハ特ニ歩兵各部隊ノ攻撃目標、前進地域若クハ進路、相互ノ連絡及識別法、攻撃奏功後ノ處置等ヲ明示スベシ又遠距離ヨリ行動スル場合若クハ運動困難ナル地形ニ在リテハ各部隊ノ行動ヲ規正スル爲中間到着地點、時刻等ヲ示ス可トス

夜間攻撃ニ方リテハ瓦斯ニ對スル警戒ヲ嚴ニシ、撒毒地域ニ對シテハ、適時迂回若クハ、制毒ノ處置ヲ講ズルヲ要ス、鐵條網、重火器特ニ側防機能等ヲ迅速ニ破壊若クハ制壓スルヲ必要トシ且他ニ適當ノ手段ナキトキ等ニ於テ企圖秘匿上支障ナケレバ戰車ヲ使用スルコトアリ此ノ場合ニ於テハ小部隊毎ニ歩兵ニ分屬シ其ノ任務ヲ勉メテ單一ナラシムルモノトス、砲兵ヲシテ歩兵ノ攻撃ニ協力セシムル場合ニ於テハ師團長ハ砲兵ノ任務特ニ歩、砲兵ノ協同ニ必要ナル事項其ノ他所要ニ應ジ射撃スベキ目標又ハ地域、時機等ヲ明示スルモノトス、狀況特ニ之ヲ要スレバ各部隊ノ指揮官ハ縦ヒ晝間十分ナル準備ヲ爲サザル場合ニ於テモ尙諸種ノ手段ヲ盡クシテ攻撃ヲ遂行セザルベカラズ、夜間攻撃ニ於テハ狀況豫定ノ如ク進展セザル場合ハ、對策ヲ考究シ、豫メ必要ナル指揮官ニ指示シ、

置、ク、ヲ、可、ト、ス、ル、コ、ト、ア、リ

夜間攻撃に於ては指揮官は精細なる計畫を定め、成るべく晝間に於て各部隊の指揮官を集めて之を命令し、以て諸準備を爲さしむべきである。

夜間攻撃に於ける戰闘指揮は、狀況に應じ當意即妙に部署を定め戰闘を指導するといふことが困難であつて、豫め詳細に搜索した敵情地形を基礎として定めた計畫を機械の運轉するが如く若干言ひ過ぎるかも知れないけれども、實行を強制するのである。故に其の計畫は最も精細に定められるを要することは了解せらるるであらう。若し夫れ粗笨なる計畫の下に之が攻撃を實施したならば、失敗疑ひなしといつても過言でないのである。

次に夜間攻撃の爲には準備の時間を要することは周知の事實である。弓張峯の夜襲の奏功したのは二週間の長時日に互り準備を整へた結果であるといつても宜しいのである。而して準備中主要なものは、敵情、地形を精細に搜索し、之に應ずる詳細適切なる處置を講ずることである。而して敵情、地形の搜索を精細ならしむる爲には之が準備を晝間から行ふことが肝要である。是晝間に於て命令を下すを要する所以である。而して夜間攻撃の戰闘指揮は弾力性を欠き機械的であ

ること上述の如くであるから、其の命令を下すに方つては各部隊の指揮官を集めて、指揮官の意圖を徹底せしめ、且相互諒解を爲して置くことが特に肝要なのである。然り而して夜間攻撃に於ける準備に關しては大體上述の如くであるが、尙細部に就て述べんか、該準備の爲考慮すべき要件は、

イ、夜間攻撃の不利益の點たる錯誤の輕減に勉むること。

ロ、同攻撃の利益たる兵力、企圖等の秘匿の擴大を圖ること。

ハ、敵情に應じ奏功を確實ならしむる爲諸般の手段を講ずること。

の三點に歸著するのである。即ち細部の準備とは此の三件を満足せしむる爲に講ずべき諸般の準備行動を謂ふのである。若し此の著意の下に準備が出来て居れば一旦行動を開始せらるるや、暗黒中なるも軍隊は何等不安疑懼の念に驅らるることなく、必勝の信念を以て目的に邁進し、行動迅速果敢能く敵の不意に乘じ、各部隊は協同連絡を保持し、指揮従つて統一せられ、成功の確實を期し得られるのである。

錯誤を輕減する爲に爲すべき準備とは、行進方向を誤らしめざる爲の處置、其の他連絡保持、友軍の識別等の處置を講ずることである。就中行進方向を誤らしめざ

る爲には進路の選定適切にして嚮導を準備することを以て主とするのである。次に我が企圖等の秘匿を圖る爲には、我が行動を發見し得べき總ての徵候を與ふることなく、準備且行動間も秘匿に注意しなければならぬのである。而して之が秘匿の爲には、警戒嚴にして敵の搜索を防止し、且靜肅を保持するを以て要件とするのである。而して之が爲執るべき規定の一例は次の如くである。

1、裝填、談話及私語を禁ず。

2、咳嗽を發する者、馬匹の嘶聲あるを同行せず。

3、武器の觸撃よりする音響を防ぐこと。

4、點火喫烟を禁ずること。

5、探照燈に照明せられたるときは直ちに地上に伏臥すること。

6、敵の監視兵、斥候は成るべく捕獲すること。

7、爲し得れば附近の地物に類似せる假裝物を以て身體を被ふこと。

8、月光等に對し劍尖の閃を消滅すること。

9、特別の歩法を以て靜肅を維持すること。

10、命令、號令、報告は記號に依り、已むを得ざるも成るべく低聲を以てし、駈歩を猥り

に行はないこと。

以上は消極的準備であつて、尙積極的準備としては、夜間攻撃前に於て同一行動を繰り返し敵をして之に狙れしめ、出發前に於ける晝間の準備運動を慎重にし、敵の諸搜索に對し豫防し、土人の出入を警戒して我が企圖の漏洩を防ぎ、且軍隊を現地に於ける地形に應ずる行動及集合に慣熟せしむるを要するのである。第二師團弓張岩の夜間攻撃に於ける兩翼隊長は詳細適切なる訓示を爲し、又旅順攻圍に於ける夜間攻撃は、各隊共以上の諸件に關し適切なる規定を爲したものが多いのも之が爲である。之に反し第十師團三塊石山の夜間攻撃に於て、歩兵第四十聯隊は猥りに射撃を交換し、又歩兵第三十九聯隊の三塊石村に於て號音を吹奏した如きは實に其の事の誤れるものといはなければならぬのである。

次に夜間攻撃の奏功を確實ならしむる爲執るべき手段は數多あるであらうけれども、之を戦例に徴して説述せんに、敵陣地迄大なる故障なく近接し得たる軍隊が、敵陣地の堅固なる編成特に障礙物又は機關銃等の爲妨害を受け、攻撃功を奏しなかつたものが多いのである。故に敵陣地の状態に應じ、之が突破に必要な準備を講ずることが緊要なのである。即ち或は障礙物排除の爲破壊器具、超越器材を

携行するが如き、又は敵の探照燈所在地の搜索及要すれば之が破壊の方法を講じ、空中搜索に依り敵陣地の後方の状況を知るが如き是である。第十二師團の大寒坡岩附近攻撃に於て、歩兵第四十八聯隊の第三大隊は、紅石嶺附近の敵陣地に近接し攻撃を開始したけれども、地形が峻峻であつて行動の自由を有せず、何等施すに處置なき状況であつた。會、第十一中隊の一小隊を迂回せしめ、敵の側翼に迫り得たけれども、敵は依然天險を擁して動かさず、此の際手榴彈を携行して居つたならば迅雷的勢力に依つて戦況の發展を期し得たであらうと思ふ。又第六師團の西蟻蛄屯及孤家堡子附近の攻撃に於て歩兵第二十三聯隊に對せる西蟻蛄屯、歩兵第四十六聯隊に對せる孤家堡子の敵は、圍壁を有する村落に依り且機關銃を配置して居つた爲、兩聯隊は萬難を排して突撃を企圖したけれども奏功しなかつたのである。當時歩兵砲、擲彈筒或は手榴彈を以て之を破壊又は制壓せむか、突撃の成功得て期すべかりしものがあつたであらう。又第三師團の首山堡東南方高地に對する夜間攻撃に於て、歩兵第三十四聯隊第一大隊は一旦敵陣地を奪取したけれども、敵の數次の恢復攻撃の爲再び敵手に委するの已むなきに至り、勇敢にして任務に忠實なる大隊長以下をして空しく該高地に鮮血を流さしめたのも其の原因は多

々あるべきも拂曉後に於ける我が砲兵の適切なる協力を缺いたことも亦大なる原因といはなければならぬのである。又當時機關銃を有したらむには、敵の逆襲を撃退するに大なる價值があつたであらうと思はれるのである。今第二師團弓張峯附近の夜間攻撃に於ける某旅團長の下せる訓示を掲ぐれば左の如くである。

- 1、乗駄馬は後方適當なる地點に残置すること。
- 2、豫め前面兩側の地形及敵情を搜索すること。
- 3、先行部隊は土人我が行動を敵に通告するを嚴に遮斷するの手段を講ずること
- 4、各聯隊間に確實なる連絡兵を置くこと。
- 5、敵の監視兵及歩哨をして報告を爲す暇なからしめ、爲し得れば之を捕獲若くは刺殺すること。
- 6、夜間攻撃の隊形、第一線大隊は中隊縦隊の横隊か又は同隊形にて中隊毎に側面隊形を採り突撃前は正規隊形に復すべきこと。
中隊及小隊の間隔は定規より多少廣くし、豫備隊たる大隊も前と同隊形にし、第一線の後方約五百米を最大限として續行し成るべく翼後に位置すること。

- 7、夜間攻撃は白兵を主とすべきも月夜なれば狀況に依り一部短時間猛烈なる射撃後直ちに突撃に移るを可とす、彼我の識別を誤らざることには注意すべし。
- 8、敵の警戒部隊を突破せば快速に本陣地に突入し、敵をして諸準備の暇なからしむること。
- 9、奏功後夜暗なれば速かに正面及側面に斥候を派し敵情を搜索し且友軍の識別を速かにすること。
- 10、前進集合の靜肅なることは勿論、突撃奏功後直ちに隊伍を整頓し且極めて靜肅なること。
- 11、友軍との連絡は主として徒歩傳令又は記號に依るべく、徒歩傳令は三名以上又同時二組以上を出し、停止間なれば遞歩哨を出すべし。
- 12、彼我識別の爲白布を左腕に纏ふこと、暗號は問答共に越後を用ゆ。
- 13、吊魚臺集合場出發後は喫煙及談話を禁ず。
- 14、隊形の變換は誘導及記號に依り號令を禁ず。然れども突撃の時に限り號令を用ふることを得。

右訓示は尙大部隊を以てする夜間射撃の實戰的經驗少き我が國軍の當時として

は、實に適切で懇切なものと謂ふべく、如何に指揮官以下が準備に腐心せるかを想察せしむるに足るのである。

次に命令すべき事項に關しては本文にある如く、特に歩兵各部隊の攻撃目標、前進地域若くは進路、相互の連絡及識別法、攻撃奏功後の處置等を明示し、又遠距離より行動する場合若くは運動困難なる地形に在りては、各部隊の行動を規正する爲中間到着地點、時刻等を示すを可とすと規定してあるのである。

茲に中間到着點及時刻に就て一言せんに、大なる部隊の夜間攻撃に方り、遠距離より行動する場合若くは運動困難なる地形に在つては、行動發起點から敵陣地へ突入するまで一舉に前進するに於ては、各部隊の連繫を缺き、統一の下に威力ある攻撃を實施する爲支障を來さしむる虞があるのである。故に中間到着地點及該地點に到着すべき時刻を示して、各部隊の行動を統制するを可とするのである。併しながら此等の處置は、全般の行動を遅緩せしめ、延ひて我が企圖を暴露するに至る虞があるから、數多の中間地點を指定して躍進せしむるが如き處置に出づることとは慎まなければならぬのである。

本項關聯事項として赤軍及獨、佛軍教令に規定して居る條項を參考までに左に紹

介する。

赤軍野外教令第二百六十八 夜襲計畫ニ關スル任務ニ包含スベキ事項左ノ如シ

イ、襲撃地區ノ偵察ニ關スル任務、但シ偵察ハ敵ヲ欺騙スル爲廣正面ニ互リ實施セララルルヲ要ス

ロ、射撃方向、突撃地點及最終到達目標ノ選定、現地ニ於テ之ヲ指示ス

ハ、夜襲部隊ノ兵力編組

ニ、増加並ニ支授資材ニ對スル任務ノ附與

ホ、戦果擴張ノ手段及兵力、突撃目標ヲ側防スル敵陣地ニ對スル處置

ヘ、通信網ノ構成、約束記號及合言葉ノ規定

同第二百六十九 展開ノ爲ノ運動開始前夜襲ニ參加スル各兵ニ對シ左記事項ヲ詳細ニ説明スルヲ要ス

イ、行進方向、攻撃ノ對象及目標

ロ、突撃發起線ニ到ル前進隊形並ニ突撃隊形

ハ、射撃開始ノ方法

ニ、合言葉及約束記號

獨逸軍隊指揮第五百四十三 計畫ノ簡單、準備ノ周密、敵ノ意表ニ出ヅルコト及簡單ナル隊形ノ

採用ハ奏功ノ要件ナリ此ノ要件ハ強行偵察、奇襲及急襲ノ如キ小規模ノ企圖ニモ適用セララルモノトス(後略)

同第五百四十五 夜間攻撃ニ先ダチ例外トシテ之ニ任ズル部隊ノ近迫ヲ行フトキハ敵方ニ近ク位置スル部隊ノ掩護下ニ之ヲ行ヒ且短距離ナラザルベカラズ近迫路及情況ニ依リ攻撃ノ爲

ノ出發位置ハ豫メ之ヲ確定シ磁針方向ヲ決定シ且案内人ヲ準備スルモノトス薄暮ノ運動ニ方
リテモ敵ノ監視ニ對スル掩護ヲ閉却スベカラズ
小部隊ニ在リテハ行軍縱隊ニテ近迫スルヲ最モ可トス數箇ノ攻撃部隊ヲ編成スルトキハ大間
隔ヲ置キテ攻撃部隊相互ノ妨害ヲ豫防シ且此等ニ對シ勉メテ相互ニ無關係ナル攻撃任務ヲ與
フルモノトス

近迫行動ノ際ハ秩序ヲ恢復スル爲短時間ノ停止ヲ挿入スルコトアリ

佛軍大單位部隊戰術的用法教令第四百七十七(一節) 夜間攻撃ハ總ニル細部ニ互リ準備セラ
ル然レドモ其ノ實施ハ之ヲ指導シ得ベキモノニアラズ

同第四百七十九(一節) 如何ナル夜間作戰ヲ行フ場合ニ於テモ指揮官ハ氣象狀態及其ノトキノ
月明度ヲ大ニ參酌スルヲ要ス實際奇襲ノ全價值ヲ發揮セシムル爲ニハ音ニ敵ノ觀測及聽音ニ
對シ總ニル運動ヲ秘匿スルノミナラズ其ノ諸隊ヲシテ日出以前ニ其ノ新配備ヲ擬裝シ得シム
ルコト肝要ナリ

次に本條第二項に就て述べんに、夜間攻撃に方つては、瓦斯に對する警戒を嚴にす
ることが肝要である。又撤毒地域に出會するときは危害を被り又急遽之を避け
んとせば混亂に陥るの害があるのである。故に速かに之を發見して適時迂回す
るか若くは制毒等の處置を講ずることが肝要である。

次に第三項は今次改正に方り戦車の使用に關し新に増補せられたのであるが、夜

間なるを以て少數戦車を使用すれば敵の對戦車射撃に對し比較的安全であつて、
且某程度の威力を發揮し得るは今次事變中に於て經驗せられた所である。即ち
本文に「鐵條網、重火器特に側防機能等を迅速に破壊若くは制壓するを必要とし、且
他に適當の手段なきとき等に於て企圖秘匿上支障なければ戦車を使用すること
あり、此の場合に於ては小部隊毎に歩兵に分屬し其の任務を勉めて單一ならしむ
るものとす」と述べられて居るが、第四百四十七の「其の他の兵種をして之に協力せし
むることあり」の意も自ら了解せらるるのである。

次に第四項に於ては、夜間攻撃に方り砲兵協力の爲、師團長の命令すべき事項を具
體的に記述せられたのである。蓋し將來戰に於て夜間砲兵協力の必要は益増大
すべきを以て、師團長は砲兵の任務特に歩砲兵の協同に必要な事項、其の他所要
に應じ射撃すべき目標又は地域竝に時機等を明確に示すを要することを明示し、
砲兵使用を適切ならしめんとするの主旨に基いたものと解するのである。即ち
夜間攻撃に於ては晝間攻撃の場合の如く、砲兵火力を時間的に將た地域的に振り
廻すことが通常困難なのである。換言すれば通常各個の攻撃目標に向ひ攻撃す
る歩兵の各部隊に對して、直接協同すべき砲兵は殆ど固定任務的に使用せられる

の已むを得ないことが多いのである。故に師團長としては歩砲兵協同に必要な事項例へば如何なる場合であるかといふに、敵陣地の一部を強襲せんとするに方り、此の部分を敵陣地の他の部分から砲兵を以て遮断せんとする場合或は第一線歩兵をして各個の攻撃目標に向ひ攻撃せしむるに方つて、敵の後方部隊の逆襲を阻止せしむる爲某地域に射撃を行はしめ、若くは敵の某砲兵、某側防機能を特に射撃せしめんとする場合等を謂ふのである。

次は第五項に就て述べんに、之は大正十二年の歩兵操典草案時代からあつた事項であつて、何等新奇の事項でないのである。既述の如く夜間攻撃なるものは晝間から周到なる準備の下に實施しなければ成功は期し難いのである。故に晝間十分なる準備が出来ない夜間攻撃は一面無理押し之感があるのである。然るにも拘らず本項の要求ある所以のものは、状況に依つては師團長以上の指揮官は部下に對して斯る夜間攻撃を實行せしめなければならぬことがあるからである。然らば斯る夜間攻撃は如何なる状況に於て行はなければならぬかといふに例へば左の如き場合である。

1. 友軍との關係上之を決行するを要する場合。

2. 晝間の攻撃を續行するに方り、豫め準備を爲さしむることの出来なかつた場合。

3. 退却に就かんとする敵を潰亂に陥らしめんとする場合。

4. 晝間力行したる攻撃が奏功せずして夜に入り、翌拂曉攻撃の爲夜間某部隊をして某要點を奪取せしめんとする場合。

第六項は綱要第四百十八の第一項中の「又状況に依り萬一失敗せる場合の處置を豫め必要な指揮官に指示し置くを要することあり」に補給を加へ失敗せる場合の處置と限定せざることとせられたのである。即ち「夜間攻撃に於ては状況豫定の如く進展せざる場合の對策を考究し、豫め必要な指揮官に指示し置くを可とすることあり」と改められたのである。

(一戰四九)

第五百十二 夜間攻撃ニ任ズル歩兵ハ通常第一線ト豫備隊トニ區分ス而シテ縱深深ク敵陣地ヲ奪取セントスルトキハ二線ノ攻撃部隊ヲ設クルコト少カラズ此ノ場合ニ於テモ所要ニ應ジ豫備隊ヲ設クルモノトス

夜間ニ於テ第一線部隊ノ突入スベキ地點ハ攻撃目標ニ依リ差異アルモ通常敵ノ守備就中障礙物薄弱ナルカ又ハ我ニ近接シアリテ攻撃容易ナル部分ニ之ヲ選定スルヲ可トス而シテ敵陣地ノ突出部ニ對シテハ其ノ背後ヲ攻撃シ該地區ノ守兵ノ退路ヲ遮斷スル如ク陣地ノ四部ニ對シ突入スルヲ可トスルコトアリ又敵陣地ノ間隙ヲ突破シ敵ヲ背後ヨリ攻撃スルヲ可トスルコトアリ此等ノ場合ニ於テハ特ニ友軍相互ノ衝突ヲ避クル爲細心ノ注意ヲ加フルヲ要ス

豫メ障礙物ノ破壊ヲ必要トスルトキ之ガ時機及方法ヲ如何ニ選定スベキヤハ狀況ニ依ル

夜間攻撃に任ずる歩兵の部署法には次の二種の場合があるのである。

1. 通常の場合であつて、第一線と豫備隊とに区分するもの。
2. 特別の場合であつて、縦深深く敵陣地を奪取せんとするとき、二線の攻撃部隊を設くるもの(此の場合に於ても所要に應じ豫備隊を設く)。

夜間攻撃に於ける歩兵部署を述ぶるに先だち、攻撃目標には幾何の兵力を充當すべきやに就て述べる必要があると思ふ。

夜間攻撃に方り各攻撃目標に配當すべき兵力は、單に某一點を奪取せんとする場合に於ては、該地點の大小、強弱が主として之が決定の素因を爲すのであるけれども、晝間の攻撃を續行するか又は狀況上大部隊を以て夜間攻撃を敢行するに方つては、攻撃目標の數をも考慮の中に置く必要があるのである。而して晝間の攻撃を續行するに方つては、此の數は師團長に於て決定する場合と、第一線歩兵隊長に於て決定する場合との兩者存することは勿論である。例へば夜間攻撃續行の師團命令に於て、右翼隊は主力を以て某高地、一部を以て某部落を、左翼隊は某高地を奪取すべしといふ様に命令する場合と、同師團命令に於ては兩翼隊長に對し各當

面の敵に對し攻撃を續行すべきを命じ、兩翼隊長に於て攻撃目標を單に一箇にすべきや若くは二箇以上にすべきやを定むる場合との兩者があるのである。即ち前者の如く命令するのは師團長として此の高地此の村落を奪取せしめたならば、敵に對して決定的打撃を加へることが出来るといふ様な場合であつて、後者の如く命令するのは、師團長として兩翼隊長に對して特に注文すべき地點のない場合であるのである。固より夜間攻撃を續行するのは前者の如き價值ある地點のある場合を最も有利とし、最も望ましいのであるけれども、友軍との關係上夜間尙攻撃を續行する様な場合に於ては、常に必ずしも然うは行かないのである。而して此等の各攻撃目標に用ふる兵力過大なるときは、諸種の錯誤及混亂を生じ、甚しきは友軍相搏つの悲劇を演じ、事前に攻撃を不可能ならしむる虞があるのである。又過小なるときは、全然不意に乘じ得る場合を除き、効果が少いのを普通とするのである。

抑、夜間攻撃は志氣旺盛であつて、且團結の鞏固なるを要件とするのである。而して個人的志氣は旺盛でも團結鞏固ならざれば、大なる價值を發揮することが出来ないのである。日露戰爭に於て彼の第八師團より選拔せる集成部隊を以て、甘官

屯及揚士屯に向ひ實施せる攻撃の失敗に陥つたのは、明かに之を證明するものと云ふべきである。故に突破に要する兵力は團結の鞏固なる單位たる大隊若くは聯隊を使用するを可とするのである。

又夜間攻撃は部分戦闘であるから、各攻撃目標に於ける敵に對しては、必ずや局部的優勢を占むるを要するのである。而して其の兵力の大小は専ら攻撃目標の正面の廣狹と敵の恢復攻撃に對する顧慮如何に依つて決すべきである。蓋し夜間攻撃に於ては第一衝突の結果は最も緊要であるから、該正面の廣狹が第一線たるべき兵力を決定すると共に、敵の逆襲又は恢復攻撃に對抗し又は攻撃豫定の如く進展せざる場合に應じ又要すれば奪取せる陣地を確保する爲、敵情特に敵陣地の狀況に依り、後方部隊の關係を定むるを要するからである。

以上述ぶるところに依つて、一攻撃目標に振向けらるべき兵力が決定したならば、此等各攻撃部隊たる歩兵の部署は通常第一線と豫備隊とに區分すべきである。併しながら縦深深く敵陣地を奪取せんとする場合に於ては、最初敵陣地の最前線に突入した部隊は隊伍混亂し、攻撃奏功した場合に於ても之を集結して爾後の使用に供することの出來ないのは、過去の戦例の證するところなるに鑑み、綱要第百

四十九に於て二線の攻撃部隊を設くるを可とすることがあると規定せられたのであるが、今次事變の經驗に依り、今次の改正に方り之を「二線の攻撃部隊を設くること少からず」と改めたのである。又此の場合に於ても所要に應じ、豫備隊を設くるものであると増補せられて居るが、之は歩兵操典草案の趣旨と合致せしめられたのである。但し縦深深く敵陣地を奪取せんとする場合に於て、常に必ずしも二線の攻撃部隊を設くるといふ譯のものでないことは勿論である。以下此の兩者の場合に就て部署法の大體を説述しやうと思ふ。

先づ通常の場合たる第一線と豫備隊とに區分する場合に就て述べやう。抑、晝間攻撃に於て適當に縦長を存するの要ある所以のものは、縷述するまでもなく、戦況の變化に應ずる外、主として火力の優勢を保持し、決戦の時機に於て使用すべき兵力を永く貯存し、以て決勝威力を大にせむが爲である。然るに夜間に於ては、守者の射撃効力は大なる價值を有せず、比較的容易に突撃距離に近迫し得るばかりでなく、運動の不便、指揮の困難は適時後方部隊を使用するを許さず、時機を失するに至ることがあるから、攻撃目標に於ける敵に對し局部的優勢を占むるに必要な兵力を第一線に備ふることが必要であつて、而かも可能なのである。

八盤峯附近の歩兵第十四聯隊(第一大隊欠)及歩兵第四十七聯隊の露軍歩兵第三十六聯隊に對する攻撃、饒頭山に對する歩兵第十五旅團及歩兵第二十四聯隊の攻撃並に之に對せし露軍歩兵第三百三十七及同第十聯隊の退走を見るときは、何人と雖も事實を首肯し得るであらう。之に反し遼陽附近會戰に於ける第六師團左翼隊が、西螞蟻屯に對する攻撃に於て、敵歩兵三大隊、機關銃六に對し、最初僅に一大隊を以て攻撃を開始し、慘憺たる戦況に陥つた如き、又歩兵第三十四聯隊の首山堡東南方一四八高地攻撃に方り、僅かに七中隊の兵力を數回に分ちて戦闘に参加せしめ、た爲、威力ある突撃を爲すことが出來ず、敵の逆襲に遭ひて失敗した様なのは前例と好對照である。

併しながら不慮の事變即ち敵の逆襲若くは恢復攻撃或は我が攻撃の失敗等に對應し、且要すれば占領した地點を保持する爲所要の豫備隊を必要とするのは戦史の證明するところである。

歩兵第二十旅團の三塊石山に對する攻撃に於て、同第三十九聯隊の三塊石部落に突入後新銳部隊を缺きて苦境に立つた如き、或は第六師團の西螞蟻屯及孤家堡子に對する攻撃に於て、歩兵第十三聯隊第一大隊及第二十三聯隊が、共に陣地に突入

し若くは殆ど之に達せむとしたけれども、爾後新銳部隊の來援を缺き、敵の逆襲に遭ひ多大の損害を受けて、攻守所を異にした如き之が適例である。

又歩兵第三十四聯隊の先頭大隊が、標高一四八高地に勇敢なる突撃を敢行して之を占領したに拘らず、後方部隊の到着遅れ爲に敵の撃退するところとなつたが如き、三塊石山に於ける歩兵第四十聯隊第三大隊が、第一線の後方三百米に跟随しつゝ連絡を失した如き、或は三臺子附近歩兵第十五聯隊の攻撃に方り、豫備たる第九中隊が第一線の後方千米に足らざる位置に在つたに拘らず、第一線に加入する爲三時間の多きを要した如き、通常豫備隊を必要とするばかりでなく、假令之を有する場合でも近く第一線に跟随するのてなければ時機を失するに至るべきを教示するものである。之に反し弓張峯附近の戦闘に於て歩兵第十六聯隊長が其の豫備隊と共に近く第一線の後方に前進して居つたが爲、有利に之を使用したのは豫備隊用法の好範である。但し豫備隊の用途は前述の如くであつて、攻撃部署の重點は飽くまで第一線の兵力に存することは勿論であるから、豫備隊の兵力は成るべく節約すべきは勿論である。

序ながら師團長の豫備についても一言せんに、師團長は夜間攻撃に於ても爾後の

戦況變化に應ぜんが爲、豫備隊の必要なることは、晝間と異なることなく、其の兵力は爾後の用途を顧慮し過少に失せざるを可とするのである。夜間攻撃奏功後の追撃十分ならざるは多くは之が顧慮を缺いた爲である。即ち攻撃實施後萬一の失敗に對する處置、攻撃部隊以外の敵に對する新企圖の實施又は追撃の爲には豫備隊を使用して始めて目的を達し得べきである。而して其の兵力は狀況に應じ之が使用の目的に合する如く定むべきである。之を既往の戦史に徴するに弓張峯附近の敵陣地占領後第二師團が、二十六日終日敵を追撃することが出來ずして、現陣地に停止せる原因は、敵陣地翼の據點尙敵手に存して居つた爲であつて、此の狀況に應じ得べき彈力ある豫備隊を掌握して居つたならば、尙有爲なる新企圖を實施し得たることは疑がないのである。

更に又第十二師團大寒坡峯附近の攻撃に於て、歩兵第四十六聯隊は第三大隊が、垣山に在る敵を攻撃して危険悲惨の戦況に陥つたに拘らず、師團は之に應ずべき何等の豫備隊を有せず、長く同隊をして孤立の位置に置いた如き、又遼陽會戦に於ける歩兵第三十四聯隊が、拂曉後頗る苦境に立ちて勇戦奮闘したに拘らず、機を失せず之を増援して其の成功を確保すべき部隊を缺いた如き、或は紅砂峯附近の攻撃

に於ける歩兵第十四聯隊の攻撃部隊が孤立無援不成功に終つたが如き、其他明治三十七年八月二十、二十一日第十一師團の東鷄冠山堡壘攻撃も亦、孤立無援不成功に終つた様な事實は、皆此の豫備隊の必要を絶叫するものといふべきである。次は二線の攻撃部隊を設くる場合に就て述べんに、此の二線の攻撃部隊を幾何にすべきやは、主として第一線攻撃部隊の攻撃奏功後第二段の攻撃を實施せしめんとするに方り、敵陣地の状態を顧慮して幾何の兵力を必要とするかを考察して決定すべきであつて、兩線の攻撃部隊の兵力が同等であることもあらうし、又第一線よりは第二線の方が小なることもあるのである。併しながら前の場合即ち第一線と豫備隊とに分けた場合に於ける、豫備隊の兵力よりは大であるべきことだけは斷定することが出來るのである。此の場合に於ても所要に應じ豫備隊を設くるものであることは既述の通りである。

次に第二項の突入點選定に方つて第一に考察すべきは、近接及攻撃行動の容易な地點なることである。之が爲には夜間の特性上守備就中障礙物薄弱なるか、或は我に接近しありて攻撃容易なる部分であるべきである。而して夜間は敵眼敵火を免れて思切つた行動を敢てすることが出來ることが多いのである。従つて

敵陣地の突出部に對しては、晝間攻撃の場合の如く包圍的態勢を以て攻撃することなく、却て晝間攻撃に於て最も嫌ふところの敵陣地の凹部に對して突入し突出部に於ける守兵の退路を遮斷する如く突撃するを可とすることがあるのである。又敵陣地の間隙を突破して敵を背後から攻撃するを可とすることあるは、今次事變に於て親しく經驗した所である。

次に第三項であるが、陣地攻撃の場合に於ては勿論、遭遇戦に於て日没となつた場合に於ても、敵は要點に輕易ながら障礙物を設けることがあるから、攻者としては之を破壊して夜間突撃を行はなければならぬ場合が少くないのである。而して豫め障礙物の破壊を要する場合に於て、之が時機及方法を如何に選定すべきやは一に狀況に依るのである。今一、二の例を挙げれば次の如くである。

1、日没前砲兵を以て破壊するもの。

高級指揮官は日没前に於て、夜間に入るも攻撃を續行する決心を爲し、而かも砲兵力特に準備彈藥が大である場合に於ては、日没後に於ける歩兵の突撃を容易確實ならしむる爲、日没前に於て砲兵を以て破壊口を設けしむるを有利とするのである。

2、歩、工兵を以てするもの。

砲兵を以て日没前に破壊することを許さないとすれば、適宜の時機に歩、工兵を以て之を破壊しなければならぬのである。本條第三項は實に之に關して記述せられてあるのである。而して本條に於て工兵の動作に就て何等記述なきは、工兵は此の際通常第一線歩兵に分屬せられて居るから、工兵は當然第一線歩兵中に含まれて居ると解すべきである。然り而して歩兵を以てする障礙物破壊に關しては、歩兵操典草案第六百四十五に明示せられてあるから重複を避けることにする。

(一五〇)

第五百五十三 夜間攻撃ニ任ズル歩兵ハ準備ヲ周到ニシ且不意ニ敵ニ肉薄シ白兵ヲ揮ヒ一舉ニ決戦ヲ求ムルヲ要ス

夜間攻撃ニ任ズル歩兵敵ニ近接セバ決戦ニ必要ナル兵力ヲ第一線ニ備ヘ且各部隊ヲシテ勉メテ集結セシムルヲ必要トス而シテ豫備隊ハ成ルベク第一線ニ近接セシムベシト雖モ過早ニ戦闘ノ渦中ニ投ゼザル如ク注意スルヲ要ス

夜間ノ突撃ハ至近ノ距離ヨリ之ヲ始メ各級指揮官ハ確實ニ部下ヲ掌握シ神速猛烈ニ其ノ攻撃目標ニ向ヒ突進スベシ突撃功ヲ奏シ所命ノ地線若クハ地點ニ進出セバ各部隊ハ殘存セル敵ヲ掃蕩スルト共ニ迅速ニ秩序ヲ恢復シ警戒ヲ嚴ニシ要スレバ所要ノ作業ヲ行ヒ以テ敵ノ恢復攻撃ニ備ヘ且隣接部隊トノ連絡ヲ圖リ敵トノ接觸ヲ確保シ爾後ノ行動ヲ準備スベシ

本條第一項に於て、「夜間攻撃に任ずる歩兵は準備を周到にし且不意に敵に肉薄し、白兵を揮ひ一舉に決戦を求むるを要す。」と述べられて居るが、今次事變に於て益、其の然るを経験したのである。而して本項に就て第一に述べべきことは銃劍突撃の價值と歩兵射撃の害である。歩兵は射撃することなく、最初から銃劍突撃を以てすれば鞏固なる團結と旺盛なる志氣を維持することが出来るのである。第二師團の弓張峯の夜間攻撃に於て、歩兵第四聯隊第一大隊は高家溝北方高地に、第三大隊は其の右翼高家溝東北方高地に向つたが、第一大隊の各中隊は敵の射撃を蒙り損害を受けたけれども、能く其の團結を維持し、敵陣地に突入して之を占領し、第三大隊も亦銃劍を揮ひ敵陣地に突入して之を占領したのである。又歩兵第二十九聯隊第一大隊は高家溝西北方高地に向ひ突撃したが、接戦格闘の後之を奪取し得たのである。

又第六師團右翼隊の西螞蟻屯を夜間攻撃せむとするや、歩兵第十三聯隊第一大隊は八月三十日午前四時安庄子北端を出發し、西螞蟻屯の露軍の守兵に對し敵の猛射を犯し、能く團結を維持し、敵前約十歩の地に達するを得たのである。本戦例は日没と共に戦闘を中止し、敵陣地に近く停止した部隊が、敵の正面より實施したる

攻撃であつて、敵の意表に出づることが出来ず、猛烈なる敵火を受くるも尙其の銃劍に信賴し、指揮官の掌握下に團結し前進を敢行するときは、能く敵前至近の距離に接近し得ることを示すものである。

又一舉銃劍突撃を行ふことは、敵の不意に乗ずるを得る所以である。即ち明治三十七年九月一日夜歩兵三十聯隊が饅頭山を攻撃するや、其の第二、第三大隊は敵の一部を驅逐しつつ前進し、午後九時三十分兩大隊相連繫して饅頭山東方突出部の最高地の敵に向ひ前進した。該高地には敵の歩兵二、三十名あつて我を猛射したけれども、我が勇敢なる前進に抗することが出来ず退却したのである。是露軍配備の過失に乗じて不意に急襲し、敵の第一線を突破した爲であつたのである。

千八百七十七年十一月十七日夜露軍の「カルス」要塞を攻撃するに方り、友軍の「カスリ」堡壘攻撃酣なるに際し、一縱隊は河邊を潜行し「スワリ」堡の背後に現出し、殆ど損害なく又一發の射撃を行ふことなく、僅に石造の圍牆を以て閉鎖せるに過ぎざる咽喉部に進入することを得たのである。不意を打たれたる成兵は睡魔未だ去らざるに、銃劍及銃床を以て刺殺又は撲殺せられ、偶、僅に脱するを得たものは、紊亂して市街に逃竄したのである。

之に反し夜間に於ける歩兵射撃は其の威力極めて微々たるものであるばかりでなく、企圖を暴露し且行進を遅滞せしむるの不利あるのである。凡べて夜間に於て攻者が射撃せずして靜肅に近接する動作は、防者をして極めて畏怖心を大ならしむるものである。何となれば防者は攻者の射撃なくんば全く其の兵力、位置を察知することが出来ないからである。故に夜間攻撃に方り射撃を爲す攻者は、既に其の奏功の要訣を忘れたるものと謂ふべきである。

射撃は我が企圖を暴露する例を擧げんに、千八百七十年巴里攻圍間普國近衛軍團の「ドオベビー」堡壘附近を攻撃するに方り、十月二十八日午後八時頃普の歩兵約一大隊は、「ル、ルブルジュ」に向ひ前進するに方り、若し先遣せられたる敵の小哨であつたなら之を撃退して敵情を搜索し、若し強硬なる抵抗に遭遇したならば、眞面目の戦鬪を爲すことなく退却すべき命を受け前進したが、未だ村端に達しないのに若干の擲弾兵は嚴重なる教令に違反し、装填して射撃するに至つたのである。中隊長は其の後射撃を中止することが出来たけれども、敵は一度警報を得たから、其の中隊の密集して村落に近接するや、猛烈なる射撃を以て之を迎へたのである。又射撃は行進を遅滞せしむる害があるものである。沙河會戰間我が第十師團が

三塊石山を夜間攻撃した際、歩兵第四十聯隊は十月十二日午前一時貴子山西方獨立部落を出發し前進した。其の第二線たりし第三大隊は第一線から十乃至二十米毎に連絡兵を配置し、約三百米を距てて跟隨した。而して第一線部隊は前進すること十數分にして、三塊石山西南麓の敵前約三百米の線に達するや、敵火を受けたのである。茲に於て第一線部隊は直ちに之に應射した。而して右翼第一線大隊たる第二大隊は更に前進するや、左側から敵の瞰射を受くるに至つたから、第八中隊(一小隊欠)を左に方向を變換せしめ、此の敵と射撃を交へ且防禦工事を爲さしめた。當時第一線は三塊石山を距ること五十米の線に在つて、一舉して突撃するより他に策がなかつたのである。然るを既に停止して工事を爲すに至つたのは、實に射撃に依り誘致せられたるものである。後ち第五中隊及第六中隊の進出を待ちて突撃し敵陣地の一部を奪取したのは午前四時二十分である。出發地點と三塊石山との距離は千五百米であつて、其の中間の地形は甚しき錯雜地ではなく、而かも出發後突撃時迄に實に二時四十分間を費消したのである。而して其の原因は多々あるであらうけれども、射撃開始の弊が與つて力ありしことは多言を要しないところである。

故に歩兵射撃は夜間攻撃を不成功に陥らしむる有害のものであるといふことが出来るのである。

次に歩兵の攻撃部署であるが、之に關しては前條に述べたから之を省略することにする。而して豫備隊は成るべく之を第一線に近接せしめなければならぬことも亦之に關する前條の戰例に依つて理解せられることと信ずるのである。併しながら夜間攻撃に於ては戰場心理の然らしむるところとして、何れの部隊も先づ開始した他部隊の戦闘に吸引せられる可能性を有するのである。従つて第一線部隊と豫備隊との距離が過近であるときは、未だ時機到らざるに先だち過早に戦闘の渦中に投ずるに至る虞があるのである。故に此の距離を過近ならしむることは避くべきである。

次に、夜間の突撃は至近の距離より之を始め、各級指揮官は確實に部下を掌握することの肝要であることは既述の通りであるが、突撃實施に方り神速猛烈に其の攻撃目標に向ひ突進するを要するのである。此の事は事變の經驗に鑑み所謂敢爲前進の主義を採用せられたのであつて、今次の改正に増補せられた要項である。突撃功を奏し所命の地線若くは地點に進出せば、各部隊は不取敢殘存せる敵を掃

蕩すると共に迅速に秩序を恢復し警戒を嚴にし、要すれば所要の作業を行ひ、敵の恢復攻撃に備へ且隣接部隊と連絡を圖り、敵との接觸を確保して爾後の行動を準備することが必要である。蓋し夜間攻撃に方つては、攻撃成功した場合に於ても尙且隊伍混亂して、爾後直ちに活潑なる行動に移ることが困難となるを通常とするからである。

左記獨逸軍隊指揮、赤軍野外教令の條項は第四百四十七、本條及第五百五十五關聯條項であるが、便宜上茲に掲げ参考に供しやうと思ふ。

獨逸軍隊指揮第五百四十八 射撃準備ナクシテ攻撃スルトキハ攻者ハ奇襲ニ依リテ成功ヲ求

メ白兵ヲ揮ヒ喊聲ヲ發シ敵ニ向ヒ突進ス步兵重火器及砲兵ハ準備ヲ整ヘ射撃ニ依リ攻撃地區ヲ外方ニ對シ遮斷スルカ若ハ數箇ノ攻撃部隊アル際ハ該部隊間ニ存スル地區ヲ制壓スルモノトス之ガ爲豫メ目標地域ヲ確定シ置カザルベカラズ砲兵ハ以上ノ外判明セル敵ノ砲兵及迫撃砲ヲ射撃ス

射撃準備ヲ以テ攻撃スルトキハ該準備ハ通常短時間且強大ナル急襲射撃ニ制限シ之ニ續イテ時間的、地域的ニ規整セル射撃延伸ヲ行フコトアリ其他ハ射撃準備ナキ攻撃ノ際ニ準ズルモノトス

何レノ場合ニ在リテモ尙日光ノアル間ニ射撃諸元ヲ準備シ置カザルベカラズ敵ニ衝突セバ各種ノ照明手段ヲ以テ攻撃地區ヲ照明スルヲ適當トスルコトアリ發進前之ニ關

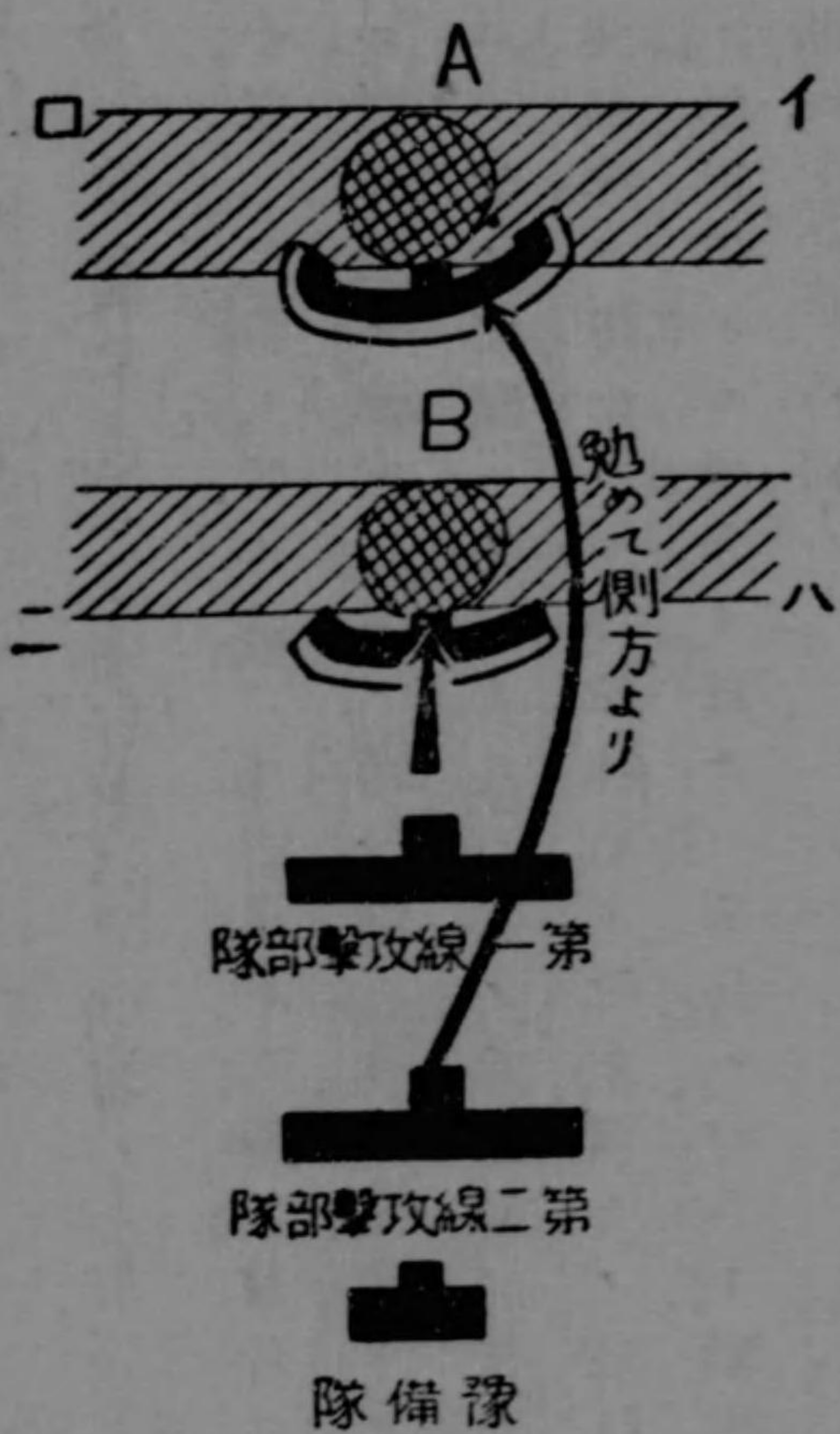
シ規定スルモノトス
 赤軍野外教令第二百六十六 夜間戦闘ノ主役ハ歩兵トス。砲兵ハ歩兵ヲ援助スルノ準備ヲ整ヘ
 敵ノ射撃開始ト共ニ速ニ射撃ヲ開始ス
 砲兵ハ夜間既ニ夜間射撃ノ爲ノ諸元ヲ準備ス。此ノ際特ニ重要ナル價值ヲ有スルモノハ襲撃地
 區ヲ隔離シ暴露セル敵砲兵ヲ制壓スル目的ヲ以テスル彈幕射撃ナリ
 同第二百六十七 夜襲ニ當リテハ敵ト衝突スルニ至ルマデ射撃ヲ行ハザルモノトシ敵ノ警戒
 兵又ハ斥候ノ如キハ之ヲ捕獲シ或ハ射撃ヲ行フコトナク掃蕩ス
 歩兵ノ隊形ハ距離間隔ヲ閉縮セル疎開隊形トス
 各部隊ハ迅速且靜肅ニ敵陣地帯前縁ニ到達シ直ニ敵ニ突入ス此ノ際其ノ側面ハ機關銃ヲ以テ
 掩護セラレザルベカラズ
 敵兵射撃ヲ開始スルヤ直ニ砲兵及機關銃ハ豫メ準備セル諸元ニ基キ敵ニ猛火ヲ集中シ之ヲ制
 壓ス
 敵ノ射撃開始後ハ探照燈及照明彈ヲ以テ突撃地區ヲ照明スルコトヲ得
 夜間戦闘ニ於テモ亦砲兵火力ヲ招致シ或ハ之ガ轉移ヲ要求スル爲モ多ク煙火信號ヲ使用ス
 ルモノトス

歩歩歩歩歩
 突突突突突

第五百五十四 二線ノ攻撃部隊ヲ設クル場合ニ於テ第一線攻撃部隊所命ノ地線若クハ地點ヲ奪取
 セバ速カニ秩序ヲ恢復シ警戒ヲ嚴ニシテ敵ノ逆襲ニ備ヘ又第二線攻撃部隊ハ適宜集結シテ第一
 線攻撃部隊ニ續行シ該部隊豫定ノ目標ヲ奪取スルヤ機ヲ失セズ勉メテ其ノ側方ヨリ超越シ所命
 ノ目標ニ向ヒ前進スルモノトス此ノ際友軍ノ相撃部隊ノ混淆等夜間ノ錯誤ヲ避クルコトニ關シ

萬全ヲ期セザルベカラズ

本條は歩兵操典第六百四十三、第六百五十一、第六百五十二、第六百五十三、第六百五
 十五、第六百五十六と調和せしむる如く茲に掲げられたのである。従つて歩兵操
 典草案の以上當該條項と對照するときは自然と本條の内容も了解せらるると思
 ふ。要するに本條は第一線攻撃部隊と第二線攻撃部隊との協調に關し記述せら
 れたのであつて、即ち本文の如く二線の攻撃部隊を設くる場合に於て、第一線攻撃
 部隊所命の地線若くは地點を奪取したならば前條の説明に於ても述べたる如く、
 速かに秩序を恢復し警戒を嚴にして敵の逆襲に備へ、一方第二線攻撃部隊は第一



説明

イ、ロ、ハ、ニは縦深深く奪取せんとする敵陣地帯
 である。
 Aは第二線攻撃の攻撃目標である。

線部隊豫定の目標を奪取するや、機を失せず勉めて其の側方より超越し所命の目標に向ひ前進すること右要圖の如くすべきである。(單に一例に過ぎず)

(一五二)

第五百五十五 夜間火器ノ威力ヲ利用シ攻撃ヲ強行スルヲ要スル場合ニ於テハ砲兵ハ通常攻撃セントスル敵陣地ノ制壓及敵ノ第一線ト後方部隊トノ遮斷ヲ行ヒ要スレバ我が攻撃ヲ妨害スベシト豫想スル敵ノ制壓ニ任ジ步兵ハ其ノ重火器ヲ以テ敵ノ自動火器、照明機關等ヲ破壊若クハ制壓シ、又逆襲部隊ヲ阻止スル等、敵陣地ト他方面トノ遮斷ヲ行フモノトス而シテ攻撃奏功セシ地點ヲ確保スル爲射撃スル場合ニ於テハ砲兵ハ步兵ト緊密ニ連絡シ敵ノ逆襲ヲ阻止スベキ要點ニ對シ適時射撃ヲ行フモノトス

火器ノ使用ハ我が企圖ヲ暴露シ且動モスレバ齟齬ヲ生ジ友軍ニ危害ヲ與フルノ虞アルヲ以テ協同スベキ歩砲兵ノ指揮官ハ晝間ニ於テ會同シ現地ニ就キ步兵ノ行動之ニ伴フ砲兵射撃之ト歩兵重火器射撃トノ關係攻撃奏功セシ地點ヲ確保スル爲ノ射撃等必要ノ事項ニ關シ周到ナル協定ヲ遂ゲ且各部隊ハ晝間ヨリ十分ナル準備ヲ整ヘ戰間ニ方リテハ各部隊ノ連絡ヲ特ニ緊密ニシ萬遺憾ナキヲ期セザルベカラズ

本條は夜間火器の威力を利用して攻撃を強行するを要する場合に就て記述せられたるものであつて、歩兵のみならず師團長としても、協力すべき他兵種としても承知し置かなければならぬことである。

先づ第一に述べべきは砲兵を夜間攻撃に參與せしめた場合に於て、砲兵射撃と歩兵突撃との關係である。他の條件を顧慮外に置くときは、歩兵の突撃は砲兵を以て敵陣地を制壓し、之を震駭せしめた瞬間に於て決行せられるのを理想とするのである。而して之が爲には歩兵は敵陣地に接近して居る必要があるのである。

然るに晝間に於てすら歩兵は砲彈の危害を顧慮して、敵陣地の最前端から二百乃至百五十米離隔して居る必要のあることは既述の如くである。故に夜間に於ては更に此の距離を大ならしむるを要することは續述を俟たずして首肯せられるであらう。果して然らば我が砲兵を以て敵を震駭せしめた瞬間に於て、歩兵が突撃を決行せんとすることは言ふべくして行はれないことである。従つて砲兵が此の制壓射撃を終了した後成るべく速かに歩兵が突撃を行ふ様に勉めることを以て満足しなければならぬのである。之が爲には次の二條件を必要とするのである。

1. 我が歩兵は砲兵の射撃の危害は若干之を忍んでも、成るべく敵に近接して突撃の時機を待つべきである。
2. 砲兵が夜間攻撃に參與する以上は其の制壓射撃は不徹底では駄目である。即ち該射撃を十分に實施して之を終了した後、敵歩兵が直ちに擡頭し得るが如き

ことなきを要するのである。

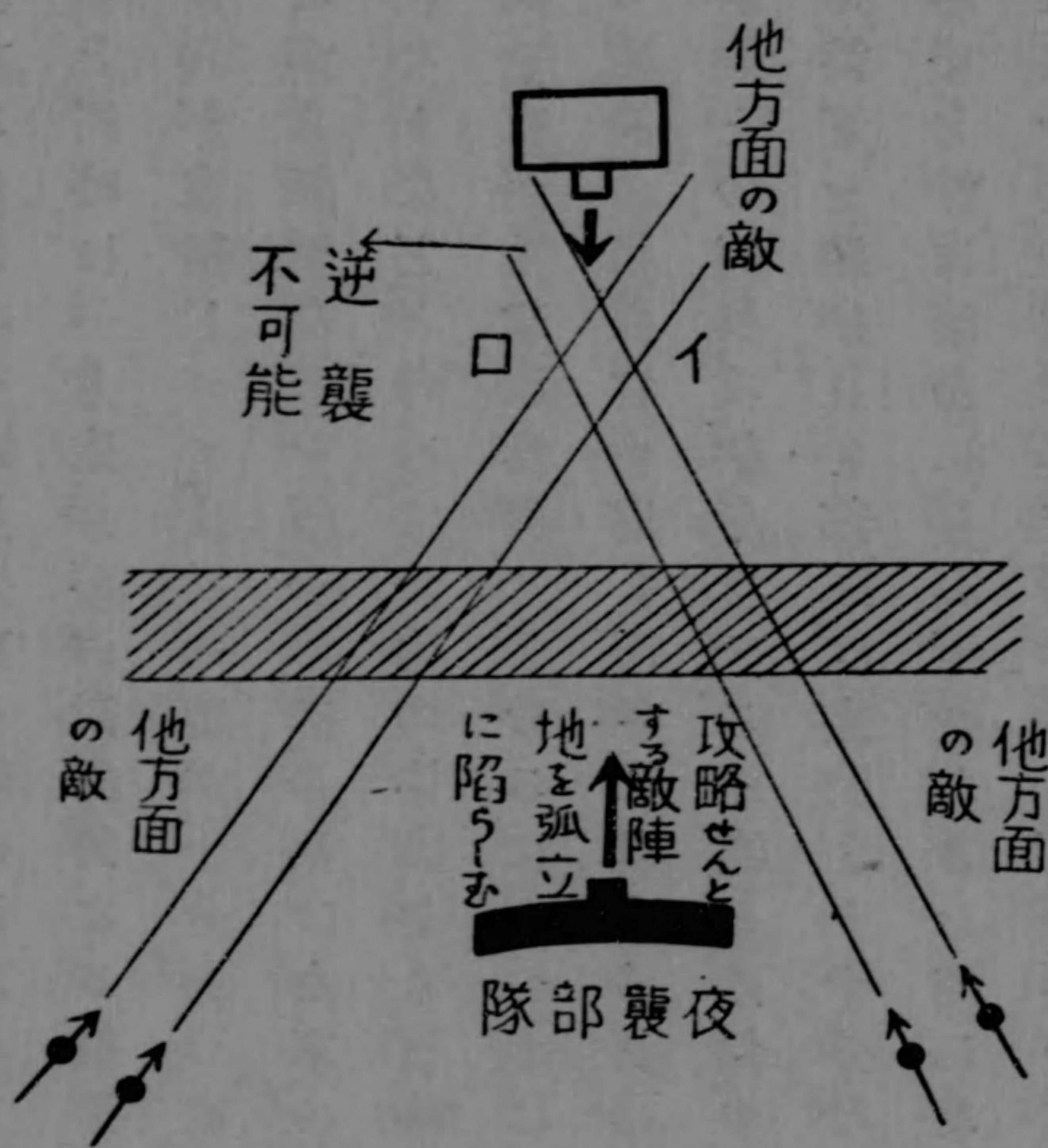
右兩條件を緊要とする一つの戦例を紹介せんに、奉天會戰中三月六日夜我が第八師團は、其の歩兵の主力を擧げて津川大佐の指揮の下に、揚士屯に向つて夜襲を決定したのである。此の時我が砲兵の一部は寧官屯附近から射撃を以て此の夜襲を援助したのである。砲兵は前日來戰鬪を繼續して居つたこととて、此の夜間の射撃は著々效を奏したのである。併しながら夜襲に任ずる歩兵部隊が敵前至近の距離に近接するや、我が砲兵の近著彈は少からず損害を我が歩兵に與へたのである。固より敵陣地に著發する彈丸の效力も著しいので敵は動搖を始め、一部は既に陣地を撤するといふ有様であつたのである。茲に於て歩兵は愈々突撃に移らんとしたが、如何にも友軍砲兵から被る危険が大であつたから躊躇して居るといふと、此の時何んと考へたか戦理に暗き一下級幹部は傳令を馳せて砲兵の射程延伸を要求したのである。之が爲か將た偶然か、砲兵の著彈は延伸し、次で射撃は中止せられたのである。茲に於て今まで退却しかけて居つた敵は再び陣地に舞ひ戻つて備を立て直したのである。そこで歩兵は今や躊躇すべきでないから、無理押しに突撃を反覆したが奏功しない。其の内遂に天明となつたばかりでなく、主

力たる左翼方面の撤退に會ひ、兩側面から逆襲せられて右翼方面に向つたものは、茲に殲滅せらるるに至つたのである。若し此の時友軍よりする砲兵の危険を顧慮することなく、斷然突撃を敢行したならば、突撃は奏功したのであらうと思はれると同時に、一方砲兵が尙徹底的なる射撃を行うたならば、其の射撃を止めた後で歩兵が突撃しても、成功の望が十分あつたであらうと感ぜられるのである。併しながら誤解なきを望むのは、歩兵は友軍の砲火の危害を被ることは、是夜間攻撃の特色なりなどと考へて、歩砲の協調をも省略するに至らざることである。即ち砲兵を夜間攻撃に參與せしむるに方つては、本條にも要求しあるが如く、晝間に於て歩砲兵の指揮官會同し現地に就き歩兵の行動之に伴ふ砲兵射撃、之と歩兵重火器射撃との關係、攻撃奏功せる地點を確保する爲の射撃等必要の事項に關し周到なる協定を遂げ、且各部隊は晝間より十分なる準備を整へ、戰鬪に方つては各部隊の連絡を特に緊密にし、萬遺憾なきを期しなければならぬのである。

次は歩兵の重火器使用である。歩兵の重火器は彈道性能の關係上、之を以て攻撃せんとする敵を直接制壓せんとすることは困難であるから、本文にも示されてある如く、敵の自動火器、照明機關等を破壊若くは制壓し、又逆襲部隊を阻止する等敵

陣地と他方面との遮断に任せしむるのを通常とするのである。固より大隊砲だけは晝間綿密に射撃準備を整へて置いたならば、攻略せんとする敵陣地とも制壓

することが出来るのは勿論である。然らば攻略せんとする敵陣地と他方面とを遮断するとは如何にするかといふに、上圖に於て示す如く攻略せんとする敵陣地の側方に居る敵を遮断するばかりでなく、其の後方部隊と第一線との間をも遮断することを意味するものである。此の重火器(機關銃)之に任ずるを通常とする(の射撃準備は特に正確であつて、且晝間に於て此の重火器と夜間攻撃に任ずる歩兵との間に綿密周到なる協調を整へて置く必要がある)のである。而して重火器の射撃すべき方向を適切ならしむるにあらざれば、イロ部即ち兩方面よりする重火器



の火力の交叉部をして敵後方部隊の後方に在らしむるが如き結果となる虞があることに注意すべきである。又右圖は單に一例に過ぎないのであつて、重火器をして攻略せんとする敵陣地の兩側及後方地帯を各分擔して射撃せしむる如くすることも亦一つの方法であるのである。

(一五二)

第五百五十六 夜間攻撃ノ奏功ヲ容易ナラシムル目的ヲ以テ一部隊ノ行動若クハ砲兵ノ射撃其ノ他照明等ニ依リ敵ノ注意ヲ他方面ニ牽制セントスル如キ處置ハ却ツテ敵ノ注意ヲ喚起シ全般ノ計畫ヲ齟齬セシムルノ因ヲ成スコトアルヲ以テ特ニ慎重ナル考慮ト精密ナル準備トヲ緊要トス

本條は綱要第五百五十二である。夜間攻撃の補助手段として、陽動、砲兵の射撃、照明等の應用を濫用に陥らざる範圍に於て緩和し、適用を認めて居るのである。併しながら敵の注意を喚起し計畫に齟齬を來すの因をなることあるを以て、特に慎重なる考慮と綿密なる準備を緊要とするのである。

之を戦例に徴するに、明治三十七年八月三十一日日没よりの饅頭山附近の戦闘に於て露軍歩兵第三十七聯隊は同地を守備し、其の第一、第二大隊を第一線とし、第三、第四大隊を豫備とし、戦闘準備を爲さしめたのである。然るに日本軍右翼部隊は北方から饅頭山を迂回し、豫備隊の前方約四百五十米に近づいて射撃したから、露

軍の第三大隊は直ちに北方に正面を變換して射撃を開始し、第四大隊は死傷續出した爲下士兵の一部は潰亂に陥つたのである。而して此の戦闘の終期に於て、露軍第七軍團長ビルデルリング大將は稠井子に在つたが、九月一日午後十時頃日本軍時官屯の陣地に突入し、左翼方面にも亦迂回の徴ありとの報告に接し、同時四五分同地に在つたシエツク少將に命じ、其の豫備隊の内歩兵一聯隊を沙許屯、稠井子道に配置したのである。即ち此の戦例は一部を以て牽制の目的を達したものと云ふべきである。

次に千八百七十七年十一月十七日露軍は土軍の守備する「カルス」要塞を夜間攻撃せむとし、三十二大隊半の歩兵を以て七箇の攻撃縦隊を編成し、各縦隊は各砲兵を有し各方面から分進合撃を行つたのである。而して其の陽攻に任ぜられたる第七縦隊は、火砲二十四門を以て「ムクリス」及「ラスステスビー」の堡壘に對し、午後八時三十分砲撃を開始し、土軍要塞司令官をして其の豫備隊の一部を該方面に使用せしめたのである。

又「シャデロツク」少將の第一縦隊は歩兵五大隊と火砲二十四門を以て、午後九時稍過其の砲兵に依り「アラープ」^{「カラダツク」}の線に對して砲撃を開始し、本攻撃の如く誤認せしめ、以て突然砲撃を中止し、斯くの如くすること再三にして終に能く土軍を欺き、午前一時突撃を實施して其の不意を衝き成功を收むるを得たのである。右の外牽制の目的を達した戦例は少くないのである。即ち此の種行動は適切に實行せられんか、偉功を奏することが多いのであつて、固より常に獎勵すべき行動とは認めないけれども、過度に慎重に失し之を忌避するが如きは本條の精神ではないのである。否、狀況之を用ふるを有利とするに於ては、思ひ切つて決行すべきを要求せられたのである。

第五百五十七 夜間攻撃功ヲ奏セバ通常拂曉以後ノ戦闘ヲ有利ナラシムル爲歩兵ノ指揮官ハ部隊ノ掌握ヲ確實ニシ重火器其ノ他配屬セラレタル諸隊ヲ適時推進シ關係部隊トノ連絡ヲ確實ニシ逐次夜間ノ態勢ニ移リ又師團長ハ速カニ全般ノ狀況ヲ判斷シテ必要ナル部隊ヲ第一線歩兵ニ配屬シ砲兵及豫備隊ヲ推進スル等爾後ノ戦闘遂行ニ關シ遺憾ナキヲ期セザルベカラズ此ノ間各級指揮官ハ速カニ敵情ヲ搜索スルコト緊要ナリ

本條は新に設けられたもので、夜間攻撃奏功後の師團長以下各級指揮官としての處置を記述されたのである。

夜間攻撃は攻撃開始時刻の關係に依り攻撃奏功後の行動に種々變化あるべきことは第四百四十九の説明に於て述べた通りである。併しながら何れの場合に於て

も續いて來るべき拂曉以後の戦鬪を有利ならしむる爲の諸準備を整ふることが肝要である。即ち本文の如く、

1、歩兵の指揮官は部隊の掌握を確實にし、重火器其他配屬せられたる諸隊を適時推進し、關係部隊との連絡を確實にし、逐次晝間の態勢に移ること。

2、師團長は速かに全般の状況を判斷して、必要なる部隊を第一線歩兵に配屬し、砲兵及豫備隊を推進する等。

の處置に出で、爾後の戦鬪遂行に關し遺憾なきを期することが肝要である。

此の間各級指揮官は速かに敵情を搜索することが緊要なのである。蓋し敵は新に部署を立て直しあることを我として豫期し得るのみならず、爾後の戦鬪指導に方り敵情を明にしあることが益、必要であるからである。

第三篇 防禦

各條の詳細に入るに先だち本命第二部に於ける防禦の意義及本篇の記述の全般に就て一言する必要を認めるのである。

大正十二年の歩兵操典草案に於ては、防禦は即ち決戦を企圖する防禦であつて、常に攻撃の動作を併せ行ふのを本則とせられてあつたのである。従つて軍の防禦を爲すに方つて其の第一線各師團は成るべく強大なる豫備隊を貯へ、軍司令官の企圖の範圍に於て苟も時機を發見したならば、斷然攻勢に轉すべき主義を採用せられてあつたのであるが、戦鬪綱要草案となるや此の主義を改められ、防禦は攻撃に對立する一戦法であつて、防禦は即ち防禦、攻撃は即ち攻撃なりとの見解の下に記述せられたのである。従つて戦鬪綱要草案に於ては軍が防禦から攻勢に轉じたならば、例へば其の半部は尙防禦の姿勢を持續しつつありとするも、軍全般としては既に攻撃に轉じたものと見解せられたのである。故に防禦は決戦を企圖する防禦の代名詞ではなく、決戦を企圖すると將た單に一地を固守するに拘らず、其の本旨とするところは物質的諸利益の發揚に依り兵力の劣勢を補ひ、且火力及

逆襲を併用して敵の攻撃威力を破摧するのに在つたのであつて、攻勢移轉は防禦戰鬪の一部でなく、防禦の範圍を脱して攻撃戰鬪に轉換したことを意味したのである。

綱要に於ても師團の全力少くも其の大部が防禦から攻勢に轉じたならば、是即ち純然たる攻撃であるといふ趣旨に於ては戰鬪綱要草案と何等變がないのであるけれども、草案と異なるところは防禦記述の主體を決戦を企圖する場合即ち攻勢防禦に置かれたことである。詳言すれば綱要に於ては防禦は爾後に於ける攻撃を準備する爲探るべき一時的の戰鬪法であると同時に、師團の一方面が攻勢に轉じたりとて之を以て師團は全般的に攻撃を行ひありと解することなく、是攻勢防禦に於ける戰鬪實施なりと認めたのである。従つて一地を固守する防禦は防禦中の特種の場合と看做すことは益詳明になつたのである。然るに本令に於ては防禦は我が軍の信念として濫りに行ふべきものにあらずして、之を行ふは他に手段なく眞に止むを得ざる場合に限るものとなして居る。(第一卷第一説明参照)

而して從來の防禦の原則は前述の如く主として攻勢を企圖せる防禦に就き記述

せられてあつたが、本令に於ては前記の趣旨に即應し、著しく優勢なる敵に對して辛うじて防禦の最小限度の目的を達成し得るに過ぎない様な、極めて困難なる場合を標準として記述せられて居るのである。勿論從來の如き防禦を行ふことも否定せられたのではないから、攻勢を企圖する場合の防禦に關し特異の事項を附記せられある譯である。

赤軍野外教令第二百二十四に「防禦は次の場合に於て行ふ」として左の五つの場合を擧げて居るが對照の爲に參考までに掲げて置く。

- イ、決戦方面に兵力を集結する爲他の正面の兵力を節約せんとする場合。
- ロ、攻勢に必要な兵力を集結し得る迄、時間の餘裕を得んとする場合。
- ハ、決戦方面に於ける攻撃の成果を待つ爲、次等正面に於て時間の餘裕を得んとする場合。

ニ、某地域(地區、地線及道路)を保持せんとする場合。

ホ、防禦に依りて敵の攻撃力を破摧し爾後攻勢移轉を行はんとする場合。

通則

第五百五十八 防禦ノ主眼ハ地形ノ利用、工事ノ施設、戰闘準備ノ周到等物質的利益ニ依リ兵力ノ劣勢ヲ補ヒ且火力及逆襲ヲ併用シテ敵ノ攻撃ヲ破摧スルニ在リ

本條は第六十二の趣旨の下に攻勢を企圖しあらざる場合に就いて記述せられ、防禦の主眼とするところを明にせられたのであつて、著しく優勢なる敵に對して爲すべき一戦法を示されたのである。故に特に物質的諸利益に依り其の兵力の劣勢を補ひ且火力及逆襲を併用して、陣地の前方に於て敵の攻撃を破摧するを本旨とすることを要求して居るのである。

扱て逆襲とは一般に何をいふかといふに、防禦に任ずる軍隊が、其の陣地前に於て敵の攻撃威力を破摧して之を撃滅し、若くは我が陣地内に侵入せる敵を撃滅する爲に行ふ攻撃動作を謂ふのである。而して前者と雖も局部的の攻撃動作であつて、敵に決定的の打撃を與ふべき攻勢移轉(攻勢移轉のこと)に關する詳細は後述する(でないことは固よりであるけれども、此の逆襲に任ずる部隊が強大であればある程、第一線部隊の行ふ逆襲は相當の威力を有し其の結果に於ては有効に敵の攻撃を破摧し得るものである)。

顧ふに綱要第五百五十三の場合に於ては逆襲を繫機として師團の攻勢移轉の誘因

たるべき可能性を與へたのであるが本條の趣旨とするところは前述せし如く攻勢移轉の企圖を有せず切に敵の攻撃を破摧すれば宜しいのである。即ち此の種の逆襲は攻撃動作に依り其の局部的に於ける敵の攻撃威力を破摧する點に於ては、綱要第五百五十三の場合と何等變りがないのであるけれども、其の攻撃動作の目的たるや攻勢移轉の誘因を爲すのでなく、敵の攻撃を破摧するにあるのであるから敵が我が陣地に肉薄し又は陣地内に侵入し來れるとき、之を撃滅するのを本旨とするのである。

尙序ながら一地を固守する防禦に於ける逆襲に就て一言する必要があるのである。此の種防禦に於て陣地の要部が敵に奪取せらるるに至りたる際に於ける逆襲は、其の性質たるや前記のものとは其の趣を異にするのである。即ち相當の準備を以て行ふべきであつて、最初から師團長の計畫の下に準備せらるるのを可とするのである。

次に逆襲と火力との關係に就て一言しやうと思ふ。本文にも火力及逆襲を併用して敵の攻撃を破摧するとあるから、逆襲とは一見突撃を意味する様であるけれども、決して然うではないのである。逆襲は前述の如く一の攻撃動作であるから、

火力と突撃とを併用することは當然である。然らば何故に此の兩者を併用することを記述してあるといふに、此の火力とは逆襲を行ふ部隊が逆襲發起までに行ふ火力を意味するは勿論、逆襲を支援する火力、逆襲を実施せざる方面に於ける部隊の火力、砲兵火力等總べての火力を意味するからである。本條に關聯しある獨逸戰團指揮及赤軍野外教令の條項を左に掲げ參考としやうと思ふ。

獨逸戰團指揮第四十一 防支ハ敵ヲ防支スルモノナリ

防支ニ在リテハ敵ノ爲不利ナル地形ヲ選定シ得ル利益ヲ有ス

防支ハ劣勢ニシテ他ニ手段ナキトキ又ハ他ノ理由ヨリ之ヲ有利ト認メタルトキニ行フモノトス

防支ニ於テハ防禦又ハ持久抵抗ヲ行フ

防禦ニ於テハ敵ノ攻撃ヲ失敗ニ歸セシムベキモノナリ之ガ爲一定ノ地域ニ於テ攻撃ヲ迎ヘ該地域ヲ最後マデ保持スベシ

指揮官ハ防禦ヲ時間的ニ制限スルコトヲ得

決定的戰勝ハ防禦ヨリ轉ジテ攻撃ヲ行フコトニ依リテノミ獲得シ得(以下省略)

同第四百二十七 防支ハ主トシテ火力ニ依リ效果ヲ求ムルモノトス故ニ防者ハ爲シ得ル限り射撃效力ヲ強大ナラシムルヲ要ス此ノ際攻者ニ比シ特ニ戰場ニ關シテ知ルコト一層詳細ナル

コト、地形ノ利用ノ度一層良好ナルヲ得ルコト、工事ニ依リテ地形ヲ補強シ併セテ掩護ノ施設ヲ行フコト並ニ陣地ニ潜伏シアル火器ノ效力運動シツツアル攻者ニ比シ優越ナルコトハ防者ノ利トスルトコロナリ

赤軍野外教令第十 防禦ニ當リテハ當該正面ノ敵如何ニ強大ナリトモ之ニ屈伏スベカラズ

防禦ハ火力資材及逆襲ニ任ズベキ部隊ノ大ナル縱深配置ヲ基礎トシテ成立ス

敵若シ陣地内部ニ於テ其ノ戦力ヲ消耗セバ歩兵及戰車ハ航空部隊及砲兵ノ支援ノ下ニ斷乎タル逆襲ヲ行ヒ之ヲ擊滅スベシ、防禦ハ之ニ依リテ始メテ劣勢ナル兵力ヲ以テ能ク優勢ナル敵ニ對シ戰勝ヲ獲得スルヲ得シムルモノトス

同第二百二十四(一節) 防禦力ハ畢竟最高度ニ火力ヲ發揚シ最モ有效ニ地形、技術及化學資材ヲ利用スルコトニ歸著ス

他方面ニ於ケル攻勢若クハ爾後ノ攻勢移轉ヲ伴フ防禦特ニ敵ノ側面ニ向フ攻勢ヲ伴フモノハ敵ヲ完全ナル壊滅ニ導キ得ルモノトス

同第二百二十五 現代戰ニ於ケル防禦ハ全縱深ニ對シテ同時ニ攻撃ヲ企圖スル優越セル敵ノ攻撃力ニ對抗シ得ザルベカラズ

即チ防者ハ陣地帯ノ前方ニ於テ敵歩兵ノ攻撃ヲ破摧スルノミナラズ左ノ如ク防禦ヲ行ハザルベカラズ

イ、敵戰車ノ陣地帯内部ニ對スル進入ヲ阻止ス

ロ、戰車ノ突破ニ當リテハ對戰車資材ヲ以テ之ヲ擊破スルト共ニ歩戰ヲ分離セシメ遮蔽セル機關銃及小銃火ヲ以テ歩兵ノ前進ヲ阻止ス

(一五八)

ハ、陣地内部ニ進入セル戦車ニ對シテハ砲火及戦車ヲ以テスル逆襲ニ依リ之ヲ撃滅ス
 ニ、歩兵戦車共ニ陣地内ニ進入セバ火力ヲ以テ之ヲ擾亂シ逆襲ヲ以テ之ヲ撃破ス
 第一百五十九 防禦ニ在リテハ一箇ノ陣地帯主陣地帯ト稱スヲ最モ堅固ナラシメ該地帯ノ前方ニ於テ敵ノ攻撃ヲ破摧スルヲ本旨トス

大正十二年の歩兵操典草案に於ては防禦工事、は唯一箇の陣地を最も堅固ならしむる如く記述せられあるけれども、綱要に於ける第五百五十八第一項の精神は單に防禦工事のみならず、主なる兵力を配備し、歩砲の火力を熾盛にし逆襲若くは攻勢移轉を行ひ、敵を破摧若くは殲滅すべき源泉地帯なることを意味したのである。然るに今次の改正に方りては防禦の主眼が全然綱要の場合と異つた爲、本條の精神とするところも亦それに順應する如く變つて居るのである。

獨逸軍隊指揮第四百三十八に「軍隊其の中に在りて防禦を行ふ地域は其の「陣地」なり。各陣地の最も重要な部分を「主戰闘地帯」とし最後まで之を保持すべし」と述べて居るが、其の精神に於て本條と共通するところがあると思ふ。又赤軍野外教令第二百二十七に次のことが述べられて居るが、其の防禦の要領に於て本條の精神と趣を稍異にして居る點があるのである。

第二百二十七 敵ト離隔シアル場合又ハ退却中陣地占領ヲ行フ場合ニ於ケル防禦ハ通常左ノ

如キ要素ヨリ成ル

イ、陣地帯前方ニ於ケル技術的又ハ化學的障り地帯

障り地帯ハ少數ノ歩砲兵ヨリ成ル前進部隊ヲ以テ守備ス

陣地帯ノ第一線ト障り地帯前縁トノ離隔ハ地形ノ状態ニ依リ差違アルモ通常約十二軒トス

ロ、直接戰闘警戒部隊及有力ナル警戒部隊占領地區

陣地帯ノ前縁ヨリ一乃至三軒ヲ離隔ス

ハ、主陣地帯(師團打撃部隊ヲ含む)

ニ、後方陣地帯

主陣地帯ヨリ十二乃至十五軒ニ設備ス

戰闘ノ經過中(敵ト接觸中)防禦ニ轉移スル場合ニ於テハ通常前方障り地帯ヲ設クルコト無ク且主陣地帯ハ爾後ノ企圖並ニ防禦ノ利便ヲ顧慮シテ之ヲ選定ス

(一五四)

第六十 防者ハ動モスレバ全ク受動ニ陥リ行動ノ自由ヲ失フニ至リ易シ故ニ各級指揮官ハ特ニ堅確ナル意志ヲ以テ勉メ、主動的ニ企圖ヲ遂行シ荷モ乘ズベキ罅隙ヲ發見セバ機ヲ失セズ之ヲ利用スルヲ要ス之ガ爲要スレバ配備ヲ變更シ又既ニ築設シタル工事モ之ヲ棄ツルニ躊躇スベカラズ

本條は防禦に於ける主動的戰闘指導の必要なることを推奨せられたのである。本篇の趣旨に依れば防者は某程度まで受動の姿勢に立つことは已むを得ないのであるけれども、全然受動に陥ることは絶対に之を避けなければならぬのである。

る。日露戦争に於て遼陽會戦後我が軍は太子河右岸の地區に於て右から第一、第四、第二軍の順序に陣地を占領して次回の會戦を準備したのである。然るに奉天附近に退却した露軍は其の増援が逐次到着したると、露國內外の各種の事情に動かされた關係上、十月初め攻勢に轉じ我が滿洲軍の右翼に主決戦を求め、我を背後連絡線外に壓迫せんとしたのである。此の際我が滿洲軍總司令部に於ては豫て築いた陣地に據つて敵を待ち、火力に依つて敵に打撃を加へた後攻勢に轉ぜんとする案と、斷然陣地を抛棄して敵に機先を制する如く攻勢に轉ぜんとする案との兩者に分れたのであるが、總司令官は第一案は徒に受動の守勢に陥り動作の自由を敵に讓る所以であつて、戦捷を獲得する所以でないと判断し十月九日遂に翌十日より敢然起つて攻勢に轉ずるに決し、我は約半數の兵力を有するに過ぎざりしに拘らず、敵を沙河の線に撃退することが出来たのである。即ち此の沙河會戦に於ける我が總司令官の會戦指導の如きは、防者として受動の姿勢に陥らなかつた好適例と見ることが出来るのである。叙上の如く退嬰受動に陥り易き敵に對しては、勉めて主動的に其の企圖を遂行せば、假令其の兵力寡弱なる場合に於ても敵をして我が行動に追隨して其の優勢を發揮するを得ざらしめ、以て我は有利に戦

闘を指導し得るものである。故に本條に於ては防者として最初某程度の先制權を敵に與へることは已むを得ないとするも、苟くも全然受動に陥りて動作の自由を失ふが如きことなく、各級指揮官は飽くまで堅確なる意志を以て勉めて主動的に最初確定せる企圖を遂行し、敵をして遂に我に従屬するに至らしめ、以て茲に彼我受動の状態を顛倒せしめ、特に利用すべき敵の罅隙を發見して之に乗じ、敵をして對應の方策なからしめて、不利の状態を益不利に導き、最早手も足も出ない様にすることが肝要であることを示されたのである。然り而して防者が上述の如く主動的に行動せんが爲には攻撃の場合よりも更に多く、敵の意表に出づることが肝要である。之が爲には例へば、

1、夜暗を利用して配備を變更し、敵の攻撃計畫に大なる違算を生ぜしめ、以て防者として戰略戰術上の奇襲の効果を發揚すること。

2、既に築設したる工事も之を抛棄して斷然逆襲に轉じ、受動の地位を主動の地位に轉換する如く勉むること（前述沙河會戦に於ける我が軍の積極的攻撃精神を汲み）。

等の思ひ切つた決心若くは處置を爲すに躊躇してはならないのである。

(一五六)

第六十一 防禦ニ在リテハ敵情就中其ノ企圖ヲ速カニ察知スルト共ニ我ガ企圖ヲ秘匿スルコト極メテ緊要ナリ故ニ各級指揮官以下諸種ノ手段ヲ盡クシテ此ノ要求ヲ充足セザルベカラズ

抑、敵情搜索及我が企圖秘匿は、獨り防禦に限らず、攻撃其の他如何なる戦闘に於ても重要な事項である。然るに本令に於て特に防禦の部に之を記述せられてある所以のものは、蓋し防禦に在つては其の當初に於ける自己の弱點を醫する手段として特種の價值を有するからであらう。

獨逸軍隊指揮第四百二十八に次の一節がある。

防止の受動性は勉めて速かに攻者と接觸を獲得し、百方搜索の手段を盡し敵の前進方向及兵力區分を確認し、且不意の脅威を受くる虞ある諸方向に機を失せず警戒の處置を爲すこと必要なり、不意の攻撃を防止する爲工事の施設中何時と雖も地區を占領し得ざるべからず、從ひて軍隊は工事の施設中既に部署せられあるを要す。

又同第四百三十一に次のことを述べて居るが、共に本條の要求と合致する點があると思ふ。

陣地の設備、守備並に其の兵力及防支の方法及其の鞏軟の程度に關し敵を僞欺

し得ば敵の意表に出づるに便なり。

(一五七)

第六十二 本篇ニ於テハ著シク優勢ナル敵ニ對シ防禦スル場合ヲ主トシテ記述シ又攻勢ヲ企圖スル場合ノ防禦ニ關シテハ特異ノ事項ヲ附記ス

本條は第三篇防禦の部の各條項を正しく理解する爲に、極めて大切なる條項である。讀者は本篇を研究するに方り、本條の精神を十分理解しあるとしても、本篇の各條項の會得が必ずしも容易であるといふことが出來ないであらう、蓋しそれは防禦の根本の主義に對し餘りにも本令に於て大修正を加へられた爲であると思ふのである。

即ち今次の改正に於ては、防禦は我が軍の信念として濫りに行ふべきものでなく、之を行ふは他に手段なき爲眞に已むを得ざる場合に限られて居る主義を明にして居る。而して從來の防禦の原則は主として攻勢を企圖せる防禦に就き記述せられてあつたが、本令に於ては前記の趣旨に即應し著しく優勢なる敵に對し辛うじて防禦の最小限度の目的を達成し得るに過ぎざるが如き極めて困難なる場合を標準として總てが記述せられて居る點は著しき相違の點である。併しながら勿論從來の如き防禦即ち攻勢を企圖する防禦を行ふことをも否定せられたので

はないのであつて、場合に依つては此の種の防禦も行ふことがあるのである。本文にもある如く「又攻勢を企圖する場合の防禦に關しては特異の事項を附記す」と記述せられある所以はそこにあるのである。讀者は本篇を研究するに方つて、能く叙上の如き意義あるところを十分了解し置く必要があるのである。

第一章 防禦陣地及陣地占領

(一五九)

第六十三 師團長防禦ヲ爲スニ決セバ敵ノ遠近ニ應ジ通常騎兵或ハ其ノ他ノ部隊ヲシテ前方ノ要線ヲ占メ搜索及警戒ニ任ゼシメ其ノ掩護下ニ陣地ヲ占領スルモノトス之ガ爲先ヅ自ラ陣地ノ偵察ヲ行フト共ニ師團砲工兵指揮官及其ノ他ノ機關ヲシテ所要ノ偵察ヲ遂ゲシメ且築城材料ノ整備ヲ爲サシム此ノ間師團長ハ諸隊ヲシテ爾後ノ陣地占領ニ便ニシテ敵眼特ニ空中搜索ニ對シ遮蔽シ得ル如ク位置セシムモノトス狀況ニ依リ行軍ノ態勢ヨリ直チニ諸隊ヲ豫定陣地ニ向ヒ分進セシムルコトアリ此ノ際機ヲ失セズ防空ノ處置ヲ講ズルコト緊要ナリ
陣地ノ偵察ハ主トシテ主陣地帯一般ノ狀態特ニ豫想スル敵ノ主攻撃方面並ニ我ガ主力ヲ配置セシムトスル方面ノ地形、地區ノ區分、戰車及砲兵ノ用法、歩砲兵火力配置ノ關係、豫備隊ノ位置等所要ノ事項ニ就キ之ヲ行フモノニシテ其ノ精粗ハ使用シ得ベキ時間ノ多少ニ依リ異ナルモノトス
師團砲工兵指揮官ハ自己及部下ノ偵察ニ基キ必要ナル意見ヲ師團長ニ具申スルヲ要ス爾餘ハ師團配屬部隊ノ指揮官モ亦之ニ準ズ

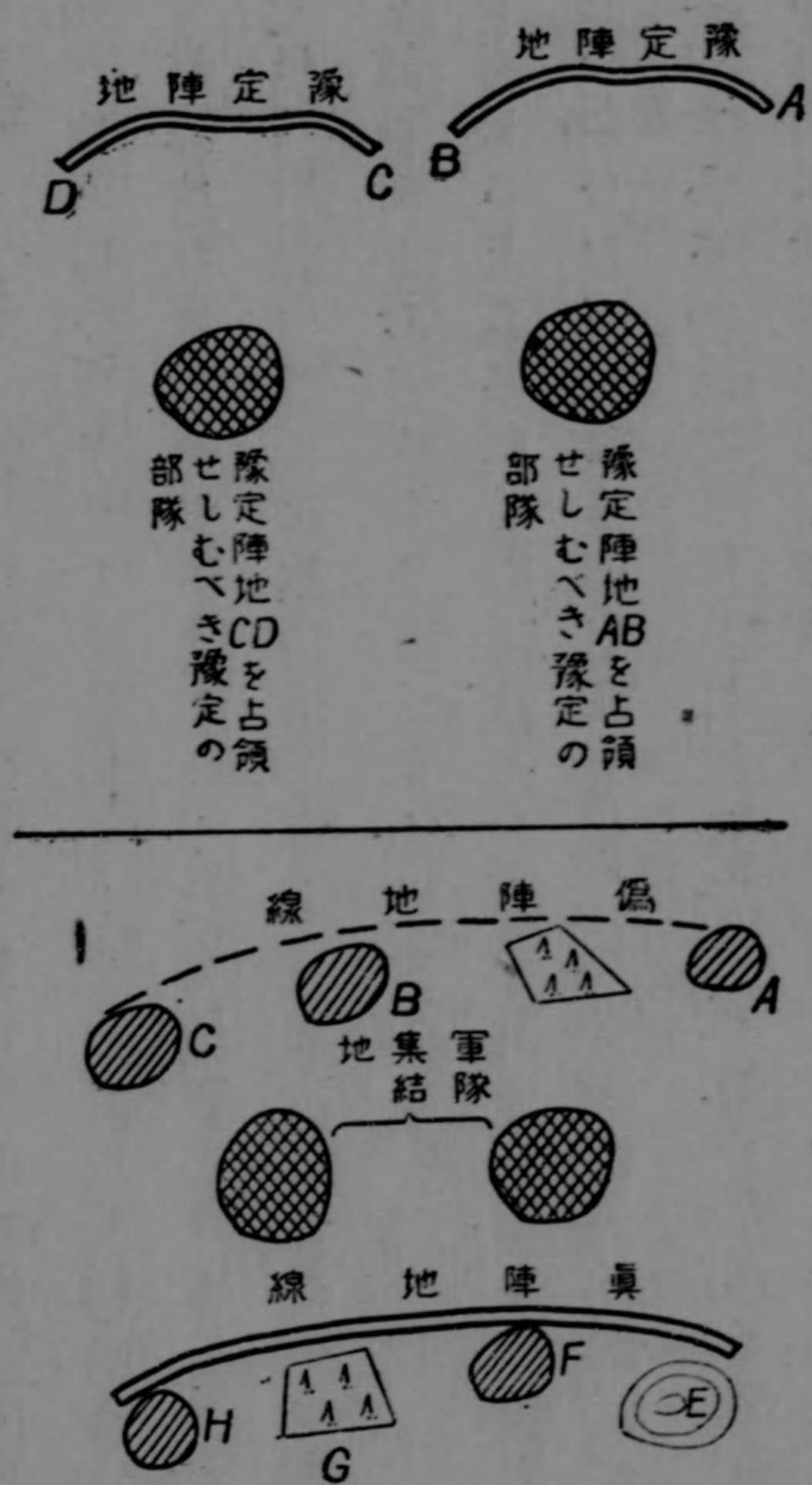
陣地偵察ノ動作ハ敵ニ我ガ陣地判斷ノ憑據ヲ與ヘ易キモノナルヲ以テ各級指揮官ハ特ニ其ノ秘匿ニ留意セザルベカラズ

本條は師團が行軍状態から陣地を占領するまでの、師團長以下の行動を逐うて記述せられたのである。

從來各種演習、教練等に於ける軍隊の此の行動は、遺憾ながら甚だ鈍重であつて、而かも空中及地上よりする敵の搜索に對しては、著しく無關心なるやの嫌があるのである。然るに陣地占領の行動を適切機敏ならしむることは防禦設備を強固ならしめ、延て防禦戰鬥を有利ならしむる爲極めて緊要であつて、上述の狀況に鑑み國軍の訓練上大に重要視しなければならぬところである。又此の行動は我が防禦の御膳立を暴露するのであるから陣地占領の行動を敵に知られることは、結局我が企圖を全然敵に告知する所以なのである。而して防禦に於て其の企圖を敵に知られたらば有形無形上に於て享有する不利は實に多大なるものがある。さて本條第一項に就て述べるが師團長防禦を爲すに決せば通常陣地占領掩護の處置を講ずるのである。蓋し陣地占領間と雖も騎兵若くは其の他の部隊を前方に派遣して敵情を搜索せしむることは常に必要であつて、又地上よりする敵の搜

索に對して我が企圖を秘匿する爲警戒せしむることも亦緊要であるからである。即ち敵に遠い場合に於ては前方に騎兵が活動して居れば之が掩護の下に偵察は勿論陣地占領をも實施することが出来るのである。併しながら敵に近い場合に於ては騎兵のみにては不安であるから騎兵以外の一部隊を派遣して此の掩護の下に陣地偵察を行ひ且之が占領を爲すを要することか少くないのである。次に述べべきは築城材料の整備である。現時火器の進歩と共に防禦の威力を益、増強せんとせば、障物物の設置を緊要とするのである。又空中及地上よりする敵の搜索、監視に對して遮蔽せんとせば遮蔽材料を必要とするのである。然り而して陣地の設備を益強固ならしめんとするに従ひ、叙上の材料の益、多きを要すると共に掩蔽部諸設の設備の爲數多の材料を要するのである。此等の材料の多くは陣地附近に於て蒐集するを要するのであつて、其の材料の現存する位置と陣地との距離は成るべく近く且交通容易なるを望むのである。何となれば此等の材料の整備に要する時間を成るべく減少することは、時機を失せず所要強度の陣地を設備し且益、之を堅固ならしむることを得る所以であるからである。佛國軍の實戦上の經驗に依るに、人力にて運搬せんとせば三百米の陸上を一日一人にて運搬

し得る量は一砲であると云ふことである。我が國軍に於て得たる實驗數も大體同様である。若し人力以外の運搬具を以てすれば更に多くを運搬し得るであらうと思ふ。而して其の量は運搬具の種類に依つて著しき差異がある。次に述べべきは諸隊を集結せしむべき位置である。該位置は左圖の如く占領せしめんとする豫定陣地線の後方であつて爾後豫定陣地線に展開して陣地を施設するに便なると共に、敵眼殊に其の空中搜索に對して遮蔽して居るを可とするのである。而して退却して陣地を占領するが如き場合に於て時間の餘裕がある場合には豫定陣地線の前方に集結地を選定することが少ないのである。又退却後に於て陣地を占領する場合でなくとも敵を



防禦 防禦陣地及陣地占領 第百六十三

欺騙する目的を以て豫定陣地線の前方に集結地を選定することがあるのである。例へば右圖(下)に於て某日晝間爲し得れば翌日拂曉までは前方A、B、Cの線に於ける偽陣地を本陣地であるが如く敵を欺騙しやうとするに方つては、豫定眞陣地E、F、G、Hの線の前方に集結地を選定し夜になつて眞陣地の線に後退占領して陣地を設備せしむるが如き場合即ち是である。

右記せるところは時間に餘裕がある爲先づ所要の偵察を行ひ、細密に防禦計畫を定め命令を下した後部下軍隊をして陣地を占領せしめんとする場合に就て述べたのであるが、左記の如き状況に於ては軍隊を集結せしむることなく、行軍縦隊から直ちに諸隊を豫定陣地向ひ分進せしむるを可とするのである。

1. 全般の状況上敵と近接したる後防禦に決したる爲、陣地占領に使用すべき多くの時間を有せず、若し之が爲時間を空費せば未だ戦闘準備完了せざるに先だち敵の攻撃を受くる虞がある様な場合。

2. 退却中の兵團が陣地を占領せんとするに方り敵は近く追撃し來れる爲、兵團は各隊をして一刻も速かに陣地を占領せしめんとする場合。

次に第二第三項は陣地偵察の要領を記述せられたのであつて、別に説明しなくと

も明瞭であると信ずるのである。

次に陣地偵察に方つては第二項に記述せられてある如く、陣地の骨幹たるべき要點の偵察を主として行ふものであるから諸偵察を不謹慎に行ふときは敵に我が陣地判断の憑據を與へることとなるのである。故に各級指揮官は其の偵察に方り特に之を秘匿することに留意しなければならぬのである。

(一六〇)

第六十四 師團長ハ任務、敵情、地形、防禦設備ノ爲使用シ得べき時日ノ長短等ニ基キ防禦ノ方針ヲ定メ防禦計畫ヲ策定ス

防禦計畫ニ於テハ戦闘指導ノ要領、主陣地帯ノ位置、陣地占領ノ爲軍隊ノ部署要スレバ部下指揮官ノ位置、觀測所ノ配當、搜索及警戒ノ處置、隣接部隊トノ連繫、陣地前ニ在ル部隊ノ行動、逆襲、防空、連絡、瓦斯防護、交通設備、陣地ノ構築、彈藥及諸資材ノ整備等ニ就キ所要ノ事項ヲ決定スルモノトス
防禦計畫ノ精粗ハ時間ノ餘裕ヲ有スル程度ニ依リ差異アリト雖モ狀況ニ適合セシムルヲ主眼トシ要スレバ爾後之ヲ補修スルモノトス

本條は綱要第六十に補修を加へられたものであるが、防禦の根本主義に於て綱要と異なる所あるは、第六十二の詳解に於て述べた通りである。而して本條第一項に於て先づ防禦の方針を確立すべきを明かにすると共に、綱要と同じく如何なる状況に於ても該計畫は常に逐次に完成せらるべきであつて、而かも其の當初の

計畫は常に状況に應じ精粗あるべき趣旨を明確にせられたのである。先づ防禦方針を定むる基礎條件に就て若干述べることにしやう。

1. 任務。

茲に任務といふのは其の達成の爲陣地前に於て敵の攻撃を破摧する場合のみを意味するのではないのである。固より本篇は著しく優勢なる敵に對して辛うじて防禦の最少限度の目的を達成し得るに過ぎざるが如き極めて困難なる場合を標準として記述せられて居るから、此の任務の中の大部分は其の達成の爲敵の攻撃を破摧するを要するに歸著するのであらうけれども等しく攻撃を破摧するにしても受けたる任務に依つては、決戦の時期、方法等防禦の方針に係するところが少くないばかりでなく、本章の原則は大體に於ては一地を固守する防禦にも適應すべきであるから、此の任務中には一地固守の場合をも含有して居るは當然である。

2. 敵情。

本篇の主義とする所に依つて觀るに、本防禦は通常獨立せる師團が行ふと見るに至當とするのである。従つて本項の敵情は師團當面の敵情であつて、常に著

しく優勢なる敵であるのである。而して敵の行動に關する豫想は二つ若くは其れ以上を考定して置かなければならないことが少くないのである。然り而して其の敵の行動が如何に依つて我が戦闘指導方針に關係を有することが少くないのは當然である。

3. 地形。

地形が防禦戦闘に影響することの多大なるは縷言を要しないのである。即ち陣地の前地及内部等の地形が千容萬態なるだけ、防禦方針に影響する度も亦甚大なのである。

4. 防禦設備の爲使用し得べき時日の長短。

防禦設備の爲使用し得べき時日が大なるときは、上述せる他の方針に適應すべき方針の下に防禦することが出来るのであるけれども、此の時日が小である場合に於ては防禦方針の確立に影響を受けることが屢である。

以上述べた如き諸條件を基礎として防禦の方針を定め、以て防禦計畫を策定するのである。

防禦計畫に於て決定すべき事項は、綱要に於て記述せられたものに若干増補せら

れてあるが、此等を定むる條項に關しては第六十五以下及本篇第二章の原則の説明に依つて自ら理解せらるるのであるから茲には説明を省略する。

本條參考條項として獨逸軍隊指揮第四百四十、第四百四十三、第四百四十四、第四百四十五、第四百四十六に赤軍野外教令第二百二十九を左に掲げて置く。

獨逸軍隊指揮第四百四十 防者敵ヲシテ正面ヨリ陣地ヲ攻撃スルノ餘儀ナカラシムルヲ得バ最モ有利ナリ防者ハ陣地ノ迂回ニ對抗スル爲脅威ヲ受クル翼ヲ後退セシメ若ハ梯次ニ配備シ得ザルベカラズ陣地ヲ迂回セントスル敵ノ企圖ニ對シテハ攻撃的方法ヲ以テ對應スルニ勉ムベシ

同第四百四十三 防禦ニ於ケル正面幅及縱長區分ハ相互ニ最モ緊密ナル關係アリ

平坦開豁地ハ丘阜地又ハ蔭蔽地ニ比シ一層大ナル正面幅ヲ取り得ルモノトス堅固ナル天然ノ障礙ハ往々警戒ノミヲ以テ足ルコトアリ戰闘兵力僅少ナルカ損害甚シキ軍隊ハ一層小ナル正面幅ヲ取ルヲ要シ又夜暗及視度不良ナル天候ニ在リテハ前線ヲ一層濃密ニ占領スベキモノトス兵力ヲ集團シテ使用スルコトニ依リ一層大ナル正面幅ヲ取り得ベシト雖防禦時間永キ際ハ通常地區ヲ連繫シテ占領スルコトヲ斷念シ得ザルモノトス

正面幅ニ關シテハ一定ノ數字ヲ示スヲ得ズ防禦ノ爲不利ナラザル地形ニ於テ正面幅ハ攻撃ニ比シ概ネ二倍ニ選定スルヲ得ベク之ヲ以テ準據ト看做スベシ

同第四百四十四 時間、作業人員及器材ノ多寡ニ依リ陣地ハ之ヲ急速的ニ若ハ堅固ニ構築ス良好ニ設備セラレタル主戰陣地帯ハ通常障礙物、散兵孔、單一火器ノ巢ノ如キ互ニ相交错隣接セ

ル防禦工事ヲ包含スルモノトス此等ノ工事ハ不規且大ナル縱長ニ配置シ且其ノ重要ノ順ニ構築スルモノトス特ニ重要ナル地點ニハ各種兵器ノ標點ヲ設クルコトアリ

防禦工事ハ地上及空中ヨリノ認知困難ナラザルベカラズ比隣工事ハ相互ニ支援シ得ルヲ要スト雖側防ノ爲正面ノ防禦ヲ不十分ナラシムルコトアルベカラズ特ニ夜暗若ハ通視不良ナル天候ニ際シテハ十分ナル正面防禦ノ可能ナルコト甚ダ肝要ナリ

總テノ防禦施設相互ノ間ニ掩護確實ナル連絡ヲ逐次構成スルヲ要ス

阻絶、低工事ト前地ニ於ケル測定點、陣地内ノ顯著ナル物體ノ除去、掩護物體、監視所及近接路ハ陣地ノ設備ヲ完全ナラシムルモノトス

同第四百四十五 軍隊指揮官ハ通常地圖ニ依リ一般ノ線(主戰陣線)ニ依リテ主戰陣地帯ヲ定ム此線ハ最前方防禦工事ノ位置ノ準據タルモノナリ軍隊指揮官ハ該線ヲ以テ併セテ防禦ニ關スル連繫ヲ確定ス下級指揮官ハ現地ニ就キ主戰陣線ヲ確定スルヲ要ス蓋シ現地ニ於テノミ最前線防禦工事ノ位置、主戰陣地帯ニ於ケル其ノ他ノ施設及其ノ守備ヲ決定シ得ベキヲ以テナリ主戰陣地帯ノ最前方防禦工事ハ砲兵及歩兵重火器ノ觀測所ノ前方ニ十分ニ推進シ且勉メテ永ク敵眼、敵火ニ遮蔽シ其ノ位置ハ敵ノ意表ニ出ヅベキモノトス故ニ敵ノ觀測ノ能否ニ從ヒ細心以テ好適ノ地形ヲ求メ且之ヲ地形ニ適應セシムルヲ要ス

丘阜地帯ニ於テハ該最前方防禦工事ヲ丘阜地ノ前方斜面ニ設ケ過早ニ敵ニ發見セラレ且敵ノ射撃ニ對シ永ク保持シ得ザル危險アルトキハ之ヲ後方斜面ニ設クルコトアリ

同第四百四十六 諸兵種ノ火力ニ依ル主戰陣地帯ノ防禦ハ敵ヲシテ遅クモ主戰陣線ノ前方ニ於テ挫折セシムル如ク準備セザルベカラズ故ニ防禦ノ經過ヲ各兵種ニ知ラシムルヲ要ス

赤軍野外教令第二百二十九

防禦ニ在リテハ狙撃軍團及師團ハ某正面ノ陣地帯ヲ擔任シ狙撃

聯隊ハ數個ノ大隊地區ヨリ成ル聯隊守備地域ヲ擔任ス

狙撃師團ノ守備スル陣地帯ハ正面八乃至十二軒、縱深四乃至六軒トシ、狙撃聯隊ノ守備地域ハ正

面三乃至五軒、縱深二軒半乃至三軒、狙撃大隊ノ守備地區ハ正面一軒半乃至二軒半、縱深一軒半乃

至二軒トス、但第一線大隊地區ハ更ニ其ノ境界ヲ接スルモノトス

本標準ハ任務、地形及對戰車防禦資材ノ多寡ニ依リ變化ス

陣地帯前縁ノ經始、兵力配置、對戰車地區ノ所在及陣地帯ノ縱深ニ關シ敵ヲ欺騙スル爲左ノ如ク

處置スルヲ要ス

イ、陣地帯前縁ノ經始ハ一定ノ型式ニ陷ル事無ク所ニ依リ或ハ高地ノ前方斜面ヲ利用シ或ハ其

ノ反對斜面ヲ利用シテ特種ノ地形又ハ地物ニ據ルコトヲ避ク

ロ、陣地帯前縁ノ經始ヲ欺騙スル爲特ニ敵ノ攻撃ニ便ナル地區ニ有力ナル警戒部隊ヲ配置シテ

陽ニ陣地帯第一線ヲ裝ヒ之ニ突入セル敵ヲ主陣地帯第一線ノ十字火ヲ以テ捕捉スル如クス

ハ、敵ノ爲遮蔽近接路、有利ナル砲兵陣地並ニ觀測所ヲ得難ク步兵及戰車ノ展開ヲ遮蔽スルニ便

ナル地帯無キ地線ニ陣地帯ノ前縁ヲ設定ス

ニ、自然的對戰車障礙ニ富ミ技術的障礙ノ設置容易ナル地線ニ沿ヒ第一線ヲ選定ス

ホ、陣地帯全部ニ互リ同一ノ縱深ヲ附與スルコトヲ避ク

ヘ、凡テノ作業ヲ周到ニ遮蔽(偽裝)ス

ト、各部隊ノ配備ハ明瞭ナル集團的配置ヲ避ケ且顯著ナル地線又ハ地點ヲ迴避シ局部的偽陣地

ヲ以テ之ヲ補綴ス

第六十五

主陣地帯ハ歩兵ノ抵抗地帯、主力砲兵ノ陣地及其ノ他ノ諸設備ヨリ成ルモノニシテ

良ク地形ニ適合シ歩兵ノ抵抗地帯ト砲兵陣地トノ關係ヲ良好ナラシメ我が歩、砲兵ノ火力ヲ該地

帯ノ前方ニ最モ有效ニ協調發揮シ得ルコト緊要ナリ而シテ敵ノ火力發揚ヲ困難ナラシメ特ニ陣

地ノ主要ナル部分ヲ成ルベク敵ノ地上觀測及戰車ノ攻撃ヨリ免レ得ル地域ニ選定スルヲ得バ有

利ナリ而シテ敵ノ戰車ニ對スル顧慮大ナルトキハ勉メテ天然ノ障礙物ヲ利用スル如ク抵抗地帯

ハ位置ヲ選定スルト共ニ敵歩戰砲ノ協同戰闘ヲ困難ナラシムル地形ノ利用ニ著意スルヲ要ス

本條には相當大なる敵戰車を豫想し敵戰車に對する顧慮大なるときに於ける注

意を述べられて居るのは見逃し得ぬ點である。

以下本條の内容に就き若干説明を加へやうと思ふ。

1、主陣地帯は地形に適合すべきこと。

主陣地帯の縦深横廣共に地形に適合することが肝要である。即ち之が地形に

適合することに依り適當の正面を以て陣地を占領し、歩、砲兵の關係配置を適當

ならしめて、十分なる火力を發揮し能く敵に遮蔽し、適時逆襲に轉ずる等の目的

を達することが出来るのである。就中敵に遮蔽することは茲に詳述して置く

必要があるのである。現時若くは將來の防禦に於て主陣地帯が地形に適合せ

ずして敵眼敵火に暴露するときは直ちに大なる損害を被つて有利に防禦を行

つては、直ちに大なる損害を被つて有利に防禦を行

ふことが出来なくなるのである。然るに我が國軍に於ては防禦陣地は成るべく高地に選定せんとする傾向が多いのである。固より著しく敵に暴露しない高地があつたならば、之に主陣地帯を選定することは何も非難すべきではないのであるけれども、敵に暴露すると否とに頓著なく常に主陣地帯を高地上に設定せんとするの悪傾向のあることは大に慎まなければならぬのである。而して固より全主陣地帯の全部を敵火及敵眼に對して遮蔽せんとすることは困難なことである。是本文に於て「敵の火力發揚を困難ならしめ、特に其の主要なる部分を成るべく地上觀測(中略)より免れ得る地域に選定するを得ば有利なり」と記述せられある所以である。又茲に地形の利用に就て改めて附け加へて置く必要のあることは戰車の攻撃に對する顧慮である。綱要に於ても此の事に關し特に注意しあるところがあつたのであるが各國軍の近時の裝備を觀察するに常に攻撃兵器として特に有力なる戰車の戰場現出を豫想し得るのである。本條に於ても此れに關し特に注意を拂はれて居るのであるから、地形の利用に方つては敵戰車の攻撃に對し考慮を拂ふべきことは重要なる著意事項となつたのである。

2. 歩兵の抵抗地帯と砲兵陣地との關係良好なること。

此の兩者の關係は地形、歩兵抵抗地帯の縱深、砲兵に課すべき任務及砲兵の射程、敵砲火を避くる顧慮、我が歩兵の抵抗地帯が突破せられたるとき敵の戰車の攻撃及歩兵火に對する顧慮等を參酌して決定すべきであつて、數字を以て規定すべからざるは勿論である。併しながら常に服膺すべき原則は此の兩者の火力を主陣地帯の前方に最も有効に協調發揮し得ることである。

3. 敵の戰車に對する顧慮。

赤軍野外教令第二百二十六に次の如く記述されて居る。
現代戰の防禦に於て第一に具備すべき要件は對戰車防禦組織なり。對戰車防禦は自然的又は技術的對戰車障礙物、對戰車地雷及其の他の人工障礙物を伴ふ各部隊並に對戰車砲兵の火制より成る。
防者の勇敢なる行動と、巧妙なる地形の利用とは小銃及機關銃の十字火と相俟つて敵歩兵に大なる損害を與へ且之を戰車より分離することを得しむるものなり。

防禦地帯の完成に伴ひ兵員を掩護する爲次の手段を講ずるものとす。

イ、敵機關銃及砲兵に對する技術的掩護設備。 ロ、對化學裝備。

右に依つて見るも赤軍が如何に防禦に方り對戰車防禦組織に重點を置きあるかが窺はるるのである。

本條に於ても敵の戰車に對する顧慮大なるときは勉めて天然の障礙物を利用する如く抵抗地帯の位置を選定することを推奨して居るのである。即ち敵の戰車攻撃を受くる虞あるときは對戰車障礙を設け且之に對し所要の火砲を充當すれば足れりとする様であるけれども、之が障礙の施設は通常大規模なるを要し又對戰車砲として事務的の火砲を多數指定することは困難とするところであるから、寧ろ本條に示されある如く勉めて天然の障礙物を利用する如く抵抗地帯の位置を選定するを可とするのである。

4、敵歩戰砲の協同戰闘を困難ならしむる地形の利用。

戰闘力發揮の爲我が歩戰砲の協同を緊要とせる所以に鑑みれば、敵の歩戰砲の協同を破壊するの著意の重要なるは自明の理である。

尙本條關聯事項として參考までに赤軍野外教令第二百三十を左に掲げて置く。

陣地帯第一線、打擊部隊並砲兵陣地ノ位置ハ對戰車ノ便ヲ顧慮シテ之ヲ選定ス(戰車ノ近接困難ナル地形地物ノ利用、側防陣地ノ配置等)

陣地帯内部ニハ對戰車地區ヲ設定シテ之ニ打擊部隊ヲ配置シ之ニ依リテ砲兵陣地並戰闘司令部ヲ掩護ス

對戰車地區ハ之ヲ環狀配置トシ其ノ相互間ノ關係ハ對戰車砲ノ有效ナル直射火力ヲ以テ火制シ得ル如ク配備セザルベカラズ

對戰車砲兵ハ陣地帯第一線ニ在リテハ夫々對戰車障礙物ヲ以テ掩護セラレ陣地内部ニ在リテハ對戰車地區ノ内部ニ之ヲ配置ス、對戰車砲ノ一部ヲ反對斜面ノ掩護下ニ分散配置スルハ有利ナリ

對戰車壕、地雷地域及其ノ他ノ障礙物ハ敵ノ正面視察ニ遮蔽セル對戰車砲ノ火制下ニ在ラシムルヲ要ス

主要對戰車地區ハ師團長之ヲ定メ聯隊長ハ之ヲ補足スル爲所要ノ對戰車地區ヲ設クルコトヲ得

(一六二)

第六十六 陣地前ノ地形ハ通常、開闔ニシテ遠キ射界ヲ有スルヲ利アリトス然レドモ狀況ニ依リテハ其ノ一部ニ於テ特ニ短小ナル歩兵ノ射界ヲ以テ満足セザルベカラザルコトアリ高地ヲ占領スルニ方リ最前線ヲ稜線ノ後方ニ配置スルガ如キ場合ニ於テハ敵方ニ面セル斜面ヲ陣地ノ他部特ニ砲兵ニ依リ射撃シ得ルコト緊要ナリ

主陣地帯ノ地形ハ戰闘ノ支撐タルニ適スル地域ヲ含ミ部隊ノ縱深配備ニ適シ良好ナル監視及觀測所ヲ有シ對戰車防禦ニ便ニシテ瓦斯滞留ノ虞少ク其ノ内部及背後ノ交通自在ニシテ敵眼ニ遮

蔽シアルヲ可トス
陣地ノ翼ハ地形上敵ノ包圍ニ對シ堅固ナルヲ得ベ有利ナリ然ラザル場合ニ於テハ部隊ノ配置、工事等ニ依リ之ヲ補フヲ要ス
陣地ノ各部ハ悉ク所望ノ價值ヲ有スルコト稀ナリ故ニ兵力ノ部署、工事等ニ依リ之ヲ補ハザルベカラズ

本條は綱要第六十二を増補修正せられたのである。而して綱要に於ては攻勢の支撐たるに適する地域を含むべきを要求せられてあつたのであるが、今次の改正には戦闘の支撐たるに適する地域を含むに改められて居るのである。以下本條の各點に就て若干の説明を加へることにしやう。

1. 陣地前の射界

陣地前の地形は通常開豁であつて遠き射界を有するを利ありとせられたのである。歐洲大戰に於て砲兵力の増大と共に偉大なる敵砲兵火を免れんとする爲には短射界を以て満足せざるべからざることを穿き違へて陣地前の射界は常に短射界を以て甘んずべきものであると誤解せる向きが少くないのである。併しながら防禦の主眼とするところは本篇の劈頭に明示せられてある通り、物質的利益に依り兵力の劣勢を補ひ且火力及逆襲を併用して敵の攻撃威力を破

摧するに在るのであるから陣地前の射界が廣濶であつて、我が火器の威力を十分發揮し得るを要することも首肯せられるのであらう。

併しながら例へば左の如き状況に在つては陣地の一部に於ては、特に短小なる歩兵射界を以て満足しなければならぬことがある。

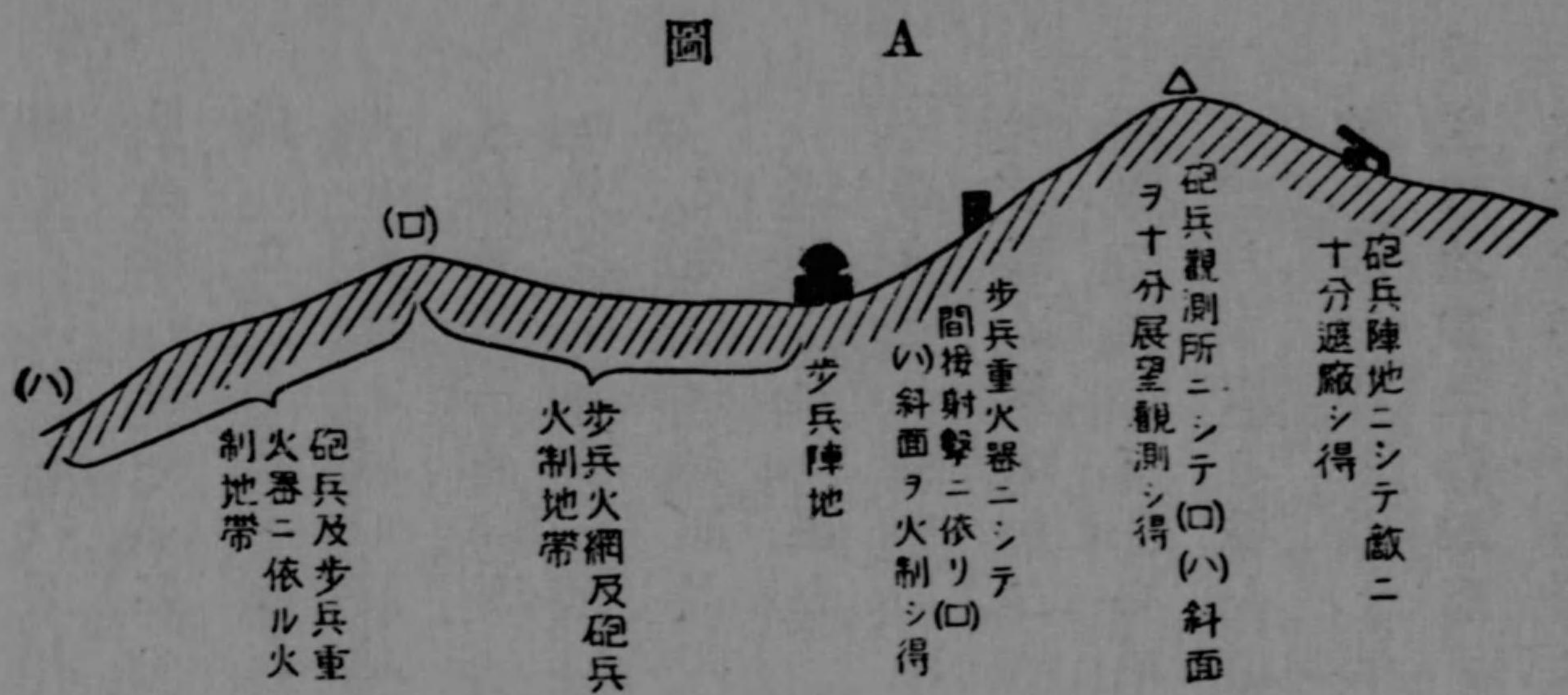
イ、陣地の一部に於て地形上廣射界を得ることが出来ない場合。

ロ、廣射界を得んとして陣地線を選ぶときは、著しく敵砲兵の彈巢となる虞がある爲、已むを得ず其の地部は之を避けて若干後退し短射界を以て甘んじなければならぬ場合。

又高地を占領するに方つては敵砲兵の彈巢となることを避けんが爲に、所謂反對斜面に陣地を占めなければならぬことがあるのである。敵砲兵が著しく優勢であつて且高地が敵眼に顯著に暴露する様な状況に於て特に然りとするのである斯る場合に於ても次圖(A圖)に示すが如く敵方に面した斜面を陣地の他部特に砲兵爲し得れば機關銃に依つて射撃し得ることが肝要である。

2. 主陣地帯上の地形

主陣地帯上の地形は特に左の諸件を具備して居ることが肝要である。



イ、戦闘の支撐たるに適する地域を含むこと。
 ロ、部戦の縦深配備に適すること。
 ハ、良好なる監視觀測所を有すること。
 ニ、對戰車防禦に便にして瓦斯滯留の虞少きこと。
 ホ、其の内部及背後の交通自在であつて、敵眼に遮蔽すること。

戰鬥の支撐たるに適する地域を含むべきことは、今次の改正に依り斯く定められたのであるが、元來廣大なる正面に互り主陣地帯を占領せる軍隊が機に乗じて斷然逆襲に轉ずる爲には特に其の逆襲發起を促進すべき支撐地域を必要とするのである。

次に現時に於ける陣地には適當の縦深を有して居ることが肝要なのである。幾何の縦深を有すべきや平地なるか高地なるか等に依つて異なるけれども、平地に在つては歩兵の抵抗地帯の爲に最小限千米を要

し、砲兵は其の後方五百米乃至千米以上の地域に於て縦深に配置するを要する。砲兵の兵力が相當大なる場合に於ては主陣地帯のみにも四千米内外の縦深を有することが肝要である。

次に良好なる監視觀測所を有するを要することは既述の如くである。獨逸軍隊指揮第四百四十七に右に關し次の如く述べて居る。

砲兵及歩兵重火器の觀測所は主戰鬪地帯の前方に於て行はるる戰鬥の爲敵の攻撃地帯を遠く展望し得るを要す。

之に反し主戰鬪地帯の直接防禦の爲には時として制限せられたる通視を以て満足せざるべからざることあり。

最前方防禦工事後方斜面に在りて、後方若くは側方よりの觀測に依り其の前方斜面を火制し得ざる場合には、戰鬪前哨の掩護の下に砲兵及歩兵重火器の前進觀測者を使用して、勉めて永く掩蔽せる高地及其の斜面に對し火力を發揚し得しめざるべからず。(後略)

次に對戰車防禦に便にして、瓦斯滯留の虞少きことであるが、對戰車防禦に便なることは、主陣地帯編成上重要なる必要條件である又瓦斯滯留の虞少きことも

大に考慮しなければならぬ。

次に内部及背後の交通等に關しては別に述べる必要がない様であるけれども、僅少なる砲兵を最も有利に使用し、或は有効に逆襲を行ふ等の爲には大に本條件を必要とするものなることに配慮すべきである。

3. 陣地の翼。

現時正面戦闘の韌強性を増加したから、陣地攻撃に方り攻者は翼を包圍せんと企圖するのは當然である。故に陣地選定に方つては其の翼は地形の掩護に依つて敵の包圍を免れる様に配慮すべきであるけれども、常に必ずしも翼を斯る堅固なる地形に依托することが出来ない場合が少くないのである。斯る場合に於ては部隊の配置、工事の施設等に依つて之を補ふべき處置を講じなければならぬのである。而して部隊を配置するに方つては、其の兵力が大であればあるに従うて、翼の側後方に離隔せしむべき度を益大ならしむるを要するのである。又工事の施設要領には翼側後に梯隊的に施設する場合と、守勢鉤形的に屈折面を設ける場合との兩者があるのである。

陣地に具備すべき性能は上述の如く種々あるのであるが、陣地の各部悉く所望の價値を有することは稀である。陣地の廣袤大なるときに於て特に然りとするのである。故に適當なる兵力の部署竝に工事に依つて之を補はなければならぬのである。即ち陣地の薄弱部には比較的強大なる兵力を用ひ、尙工事を堅固らしむるが如き是である。

(一六三)

第六百六十七 歩兵ノ火力配置ノ要領ハ其ノ抵抗地帯ノ前方ニ於テ各種歩兵火器ヲ以テ濃密ナル火網ヲ構成シ且火網外ノ要點及陣地帯内部ヲモ所要ニ應ジ有效ニ火制シ得ル如ク設備スルニ在リ

敵歩兵ニ對スル砲兵ノ火力配置ノ要領ハ警戒陣地ノ前方ヨリ主陣地帯ノ直前ニ互ル地域ニ其ノ火力ノ大部ヲ指向シ特ニ主陣地帯歩兵火網ノ直前及同火網内部ニ於テ濃密ナラシメ且主陣地帯内部ニ對シテモ所要ニ應ジ火力ヲ指向シ得ル如クスルモノトス而シテ豫期スル敵ノ主攻撃方面及我が逆襲ヲ豫想スル地域ニ於テ其ノ火力ヲ濃密ナラシムルヲ要ス又隣接兵團ノ作戰地域内特ニ之トノ接續部附近ニモ所要ノ火力ヲ指向シ得ル如クスルコト必要ナリ

先づ第一項に就て歩兵の火網配置要領に於て述べべきは左の諸件である。

1. 火網の前端は陣地の前端より幾何に在らしむべきや。
2. 火網外の要點を火制する要領。
3. 陣地内部をも火制し得しめんとする目的。

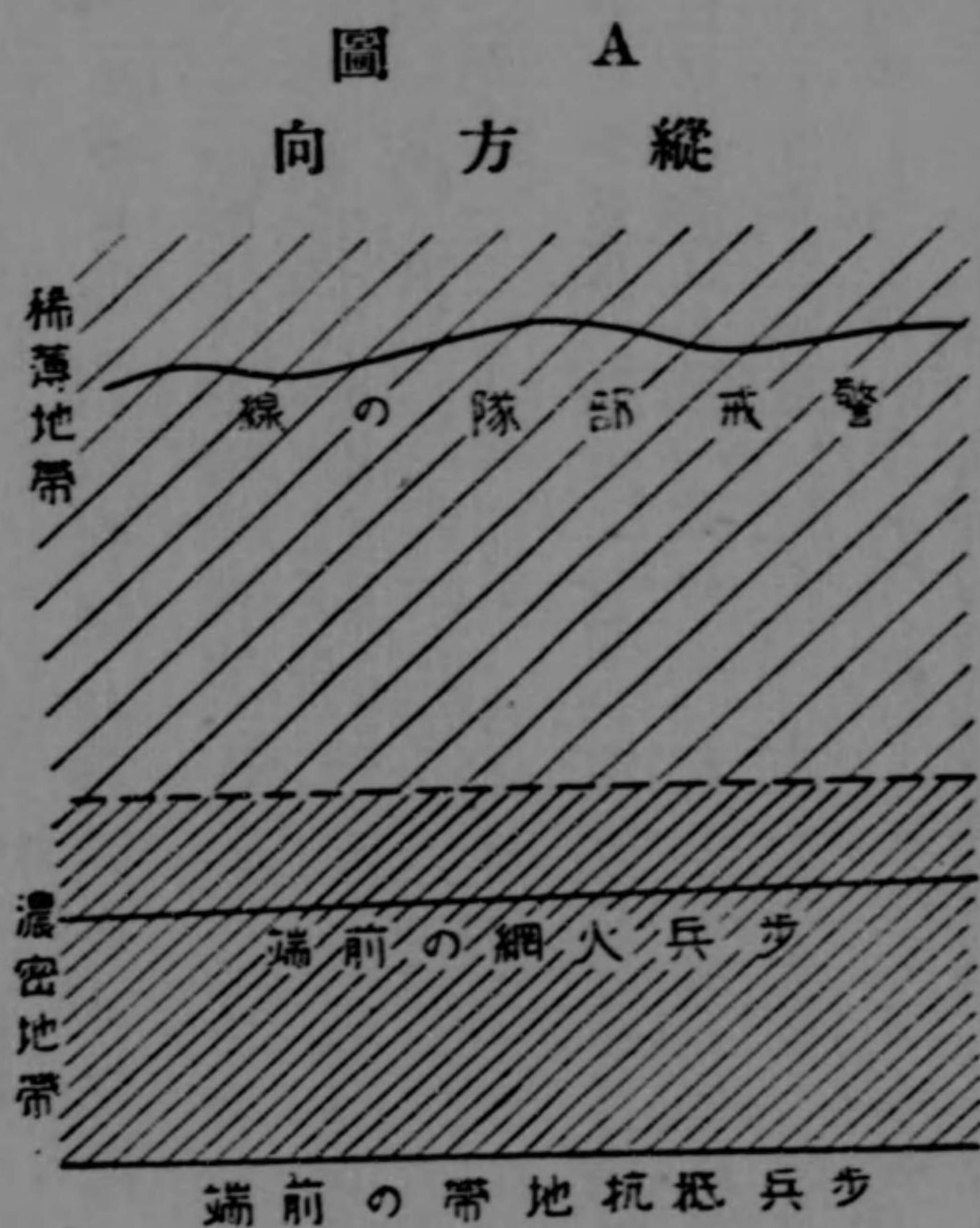
大正十二年の歩兵操典草案に於ては火網は近距離に之を構成することとせら

れてあつた爲、歩兵は近距離以外に有利なる目標が現出しても、尙且之を射撃しない弊が一部軍隊に在つたのである。蓋し近距離を文字通りに解し六百米以外には之を構成すべきでないと解せられたからである。故に次の新歩兵操典に於ては大隊長が火力配置を定むるには火網の縦深を定むる様に改められたのである。而して新操典と雖も多くの場合近距離に止むべき様に規定せられてはあつたけれども、状況に依り中至距離に延長するを有利とすることあるを明示せられたのである。それが昭和十二年の歩兵操典草案にも此の趣旨が延長せられて居るのである(第六百十二参照)。次に火網外に於て地形上敵が集結して停止しなければならぬ様な地帯或は敵の重火器が陣地を占領すべき見込ある地點、或は必ず大なる目標を表はして通過しなければならぬ地點等には豫め機關銃又は歩兵砲等を以て火制し得る如く準備して置くことが肝要である。次に陣地内部をも火制せしめんとする趣旨は、主として敵の爲陣地の一部を奪取せらるるに方り、之を奪回する爲豫備隊を以てする逆襲に協力せしめんとするに在るのである。加之陣地各部の獨立性を保持するが爲には陣地前のみならず、陣地の内部をも火制し得る様にして置くのでなければ比隣部隊の陣地が

敵手に歸するや直ちに全線崩壊の原因を成形し、終に敵をして陣地突破に成功せしむる虞があるのである。第二項の砲兵の火力配置に於て主陣地帯内をも火制し得る如くするも亦上述の趣旨に他ならないのであつて、砲兵に在つては歩兵の抵抗地帯が突破せられて、敵が我が砲兵陣地に向ひ攻撃を續行せんとするに至る様なことがあつた場合に於ても之に對して十分なる火力を指向し、敵に大なる損害を被らしむることが出来る様にするのが肝要である。

次に第二項の我が砲兵の敵歩兵に對する火力配置に就て述べんに該配置の爲には左の諸目的を達することが必要である。

1. 我が警戒陣地の前方に於ける敵歩兵の行動を妨害し、特に我が警戒陣地を攻撃せんとする敵に對して射撃を行ひ以て警戒部隊の戦闘を支援せんとする爲。



防禦 防禦陣地及陣地占領 第六十七

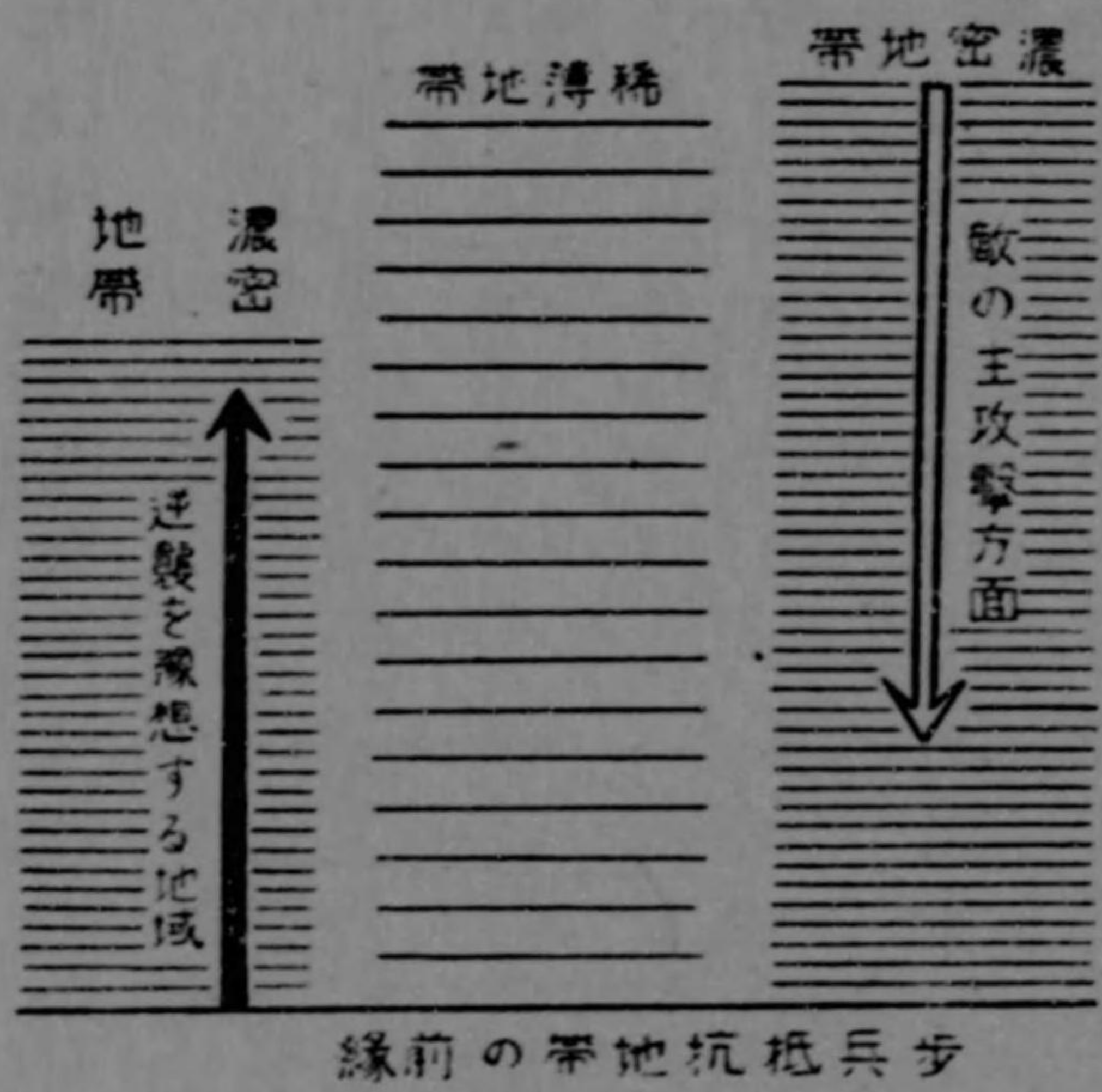
2、敵が警戒陣地奪取後爲すべき攻撃準備を妨害する爲。
3、敵の攻撃準備後攻撃前進に移るや之を阻止する目的を以てするもの。此の火力は歩兵火網の直前及其の内部に最も濃厚ならしむることが肝要である。

以上の各火力配置の状態を圖示すればA兩圖の如くである。

即ち此等兩圖に於ける濃淡の關係を重複すれば其の實況を表現することが出来るのである。

本條關聯事項として獨逸軍隊指揮第四百

圖 B 橫 方 向



五十八を左に掲げ参考としやう。

第四百五十八 主戰陣地帯ノ防禦ハ諸兵種ノ計畫的ニ準備セル射擊動作ヲ基礎トス該射擊動作ハ第四百ニ掲グル著眼ニ基キ作成セラルル射擊計畫ヲ以テ之ヲ表ハス射擊ノ設備ニ對シテモ其ノ統一、歩、砲兵ノ協同、強大ナル火力集中、脅威セラレタル地點ニ對スル射擊ノ迅速ナル集中ハ軍隊指揮官及各地區ニ於テ協同スル指揮官ノ任務トス
主戰陣地帯前ノ全地域ハ遠距離ニ至ルマデ勉メテ間隙ヲ生セザル如ク之ヲ火制セザルベカラ

ズ此ノ際各火器ハ其ノ性能ニ感ジ地形、地物ノ形狀ト其ノ掩蔽ノ如何トヲ顧慮シ相互ニ相補フヲ要ス

敵主戰陣地帯ニ近接スルニ從ヒ益、火力ヲ濃密ナラシメザルベカラズ
主戰陣地帯ニ局部的ニ突入セル敵ニ對シテモ亦各兵種ノ射擊及協同確實ナルヲ要ス

(附記、參考として同第四百を左に)

第四百 軍隊指揮官ノ攻撃計畫ハ砲兵及歩兵ノ射擊計畫ノ基礎ヲ與フルモノトス軍隊指揮官ハ砲兵ノ射擊計畫ノ作成ヲ砲兵指揮官ニ委任スルコトヲ得砲兵ノ射擊計畫ハ攻撃ノ難易ニ應ジ概括的ニ若ハ一層詳細ニ作成セラルルモノニシテ堅固ナル陣地ニ對スル攻撃ニ在リテハ歩兵攻撃ノ時間及目標決定ノ基準トナルコトアリ
砲兵及歩兵ノ射擊計畫ハ調和シアラザルベカラズ之ガ爲我が攻撃ニ對抗スル總テノ既知目標ニ威力ヲ及シ且從來不明ニシテ歩兵攻撃ノ開始若クハ其ノ經過中ニ始メテ出現スル總テノ目標就中比隣地區ヨリ側防スル目標ヲ直ニ制壓スルコト緊要ナリ故ニ歩、砲兵ノ射擊計畫ハ攻撃地帯ノ縱深ヲモ顧慮セザルベカラズ此等ノ任務達成ノ爲ニハ箇々ノ戰陣地域ニ於テ協同スル歩兵及砲兵ノ下級指揮官ノ詳細ナル協定ヲ必要トス
細部ニ就テ相互ノ補足ト援助トヲ確定シ且重要ナル目標ニ對シテハ一方ノ火力萎靡スルモ尙他ノ火力ヲ以テ引續キ之ヲ射擊スル如ク顧慮スルハ此等指揮官ノ任務ナリ
砲兵及迫撃砲ノ射擊計畫同一目標ニ對シ協同シアルトキハ迫撃砲ヲ砲兵ニ配屬スルヲ適當トスル場合アリ

第六百六十八 陣地ハ防禦ノ方針ニ基キ地形ト指揮ノ便否トヲ考慮シテ之ヲ若干ノ地區ニ分チ各

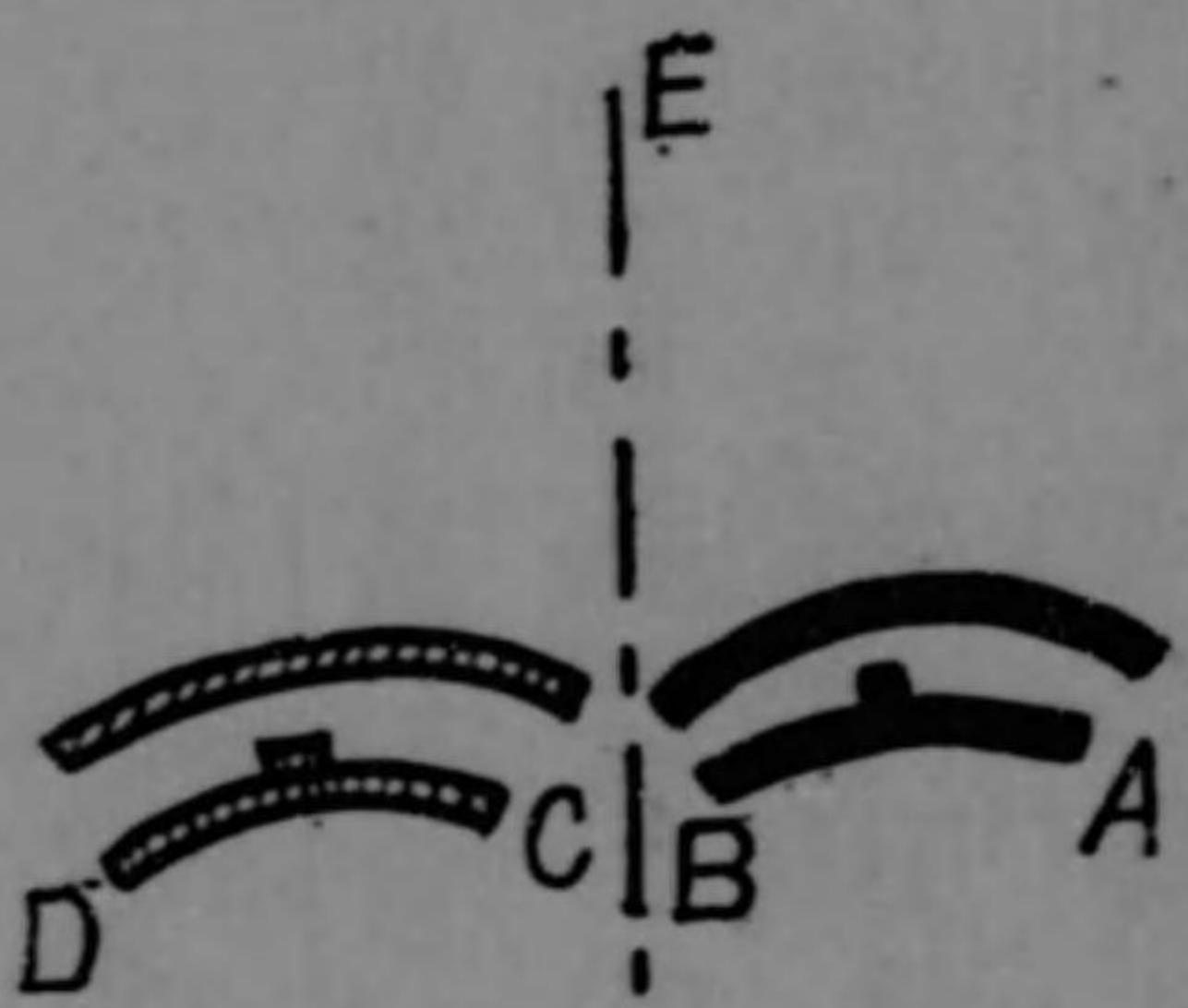
地區ニハ歩兵ヲ主トスル適應ノ部隊ヲ配置スルモノトス
 地區ノ數及之ニ備フベキ兵力ハ狀況ニ依リテ差異アリ例ヘバ豫期スル敵ノ主攻撃方面又ハ射界
 不良ナル地區ニハ其ノ兵力ヲ大ニシ陣地内ノ交通困難ナルトキハ地區ノ數ヲ増加スルガ如シ
 狀況ニ依リ各地區ノ占領部隊ヲシテ自ラ陣地前ヲ側防シ又ハ敵ノ戰車ヲ射撃セシムル等ノ目的
 ヲ以テ之ニ若干ノ砲兵ヲ又所要ニ應ジ一部ノ工兵ヲ配屬ス
 各地區占領部隊ノ戰闘地域ハ陣地ノ境界前地ノ區分、搜索及警戒ノ擔任ヲ明カナラシムル如ク抵
 抗地帯ノ後端附近ヨリ警戒陣地ノ前方ニ互リ劃定スルヲ通常トシ廣濶ナル地形ニ在リテハ標識
 ヲ設置スル等ノ處置ヲ必要トスルコトアリ

先づ本條の地區を區分する爲著眼すべき事項に就て述べれば次の如くである。

1. 單に防禦方針に基いて地區を區分する爲の著眼を述べれば、左圖に於て某敵情の下に於てはAB方面より、又他の異なる敵情の下にはCD方面より逆襲せんとする方針であるとすれば、ABCDを各一地區とする如くEFに戰闘地境を劃すべきである。併しながら之は單に防禦方針に基き大體に於て如何に地區を區分すべきやを定むる一例を述べたに過ぎないのである。

2. 右の如く防禦方針に基く大體觀念よりする地區の區分が定まつたならば、此の兩地區に於ける地形と其の廣袤竝に兵力の大小、建制關係等に基く指揮の便否

とを顧慮して、例へば左圖に於てABCDの兩地區を單に各一地區とすべきか、或は



此等を更に若干の地區に區分すべきかを決定すべきである。即ち此等の大地區が地障に依つて

隔絶せらるるとか、或は正面が著しく大で而かも陣地内の交通が不便であるとか、或は建制を異にする團隊を以て占領せしめなければならぬと

かゝる様な場合に於ては、一般に統一指揮が困難であつて、狀況に應じ地區豫備隊を適時所要の方面に使用することが出来ないか、又は部隊の混淆を來す虞がある等の爲若干の地區に區分しなければならぬことが多いのであるけれども、否らざる場合に於ては單にABCDの二地區を以て防禦することとなるのである。

右の如き著眼にて地區が決定すれば、各地區には歩兵を主とする適應の部隊を配置するのである。

次に地區に備ふべき兵力に就て述べやう。上述の如くして地區が定まつたならば、防禦方針に基き、指揮官の能力、軍隊の状態に鑑み一方地區に於ける地形の強度、

其の廣袤等を考慮し各地區に適應する部隊を配置すべきである。例へば豫期する敵の主攻撃方面又は射界不良なる地區には其の兵力を大ならしむべきである。次に第三項に就て述べやう。抑各地區の前地に死角を生ぜしめざる如くすることとは、師團長の命ずる砲兵の火力配置竝に直接協同すべき砲兵と歩兵との協同に依つて、其の目的を達すべきものであるけれども、状況特に前地の地形及防禦地區の價値を顧慮し地區占領部隊をして自己の地區の側防を有効に實施せしむる爲、砲兵の一部を該部隊に配屬せらるることがあるのである。又敵の戦車に對しては我が砲兵は適時之に火力を集中して大なる打撃を加ふる如く戦闘すべきものであるけれども、砲兵は他にも數多の任務を有するから之が目的達成にのみ没頭し得ないのは勿論、敵の戦車の兵力優勢なるときは、其の縦長に部署せる兵力を以て損害を補充しつつ近迫し來ることを豫期しなければならぬから、對戦車防禦の爲にも地區占領部隊に砲兵の一部を配屬せらるることがあるのである。又障礙物其の他の要點の破壊を補修し若くは戦車に對する爆破等の目的を以て工兵の一部をも配屬せらるることもある。而して此の種目的の爲張鼓峯事件の際の工兵部隊の活動は實に目醒しきものがあつたのである。

最後に第四項に就て述ぶるが、本項は綱要第七十一である。

本項は防禦に於ける地區占領部隊たる第一線歩兵部隊の戦闘地域の意義及之を劃定する要領を示されたのである。

陣地の境界を劃定することは、陣地内防禦の責任を明かならしむる爲必要であるばかりでなく、抵抗地帯上に於ける地區地物利用の權限を明ならしむる爲にも必要なのである。従つて村落、小なる高地等を兩分して隣接兩地區に與ふる様な區分法は甚だ當を得ないものといはなければならぬのである。而して敵を一步も陣地内に侵入せしめないのを主義とする以上は、陣地内防禦の責任を明にする爲に、陣地の境界を定める必要がない様であるけれども、實戰場裡の出來事たる、主義と實行とは必ずしも一致し難いのである。是即ち第二百二に於て「敵兵若し我が陣地内に侵入せば云々」の一條を設けられてある所以である。

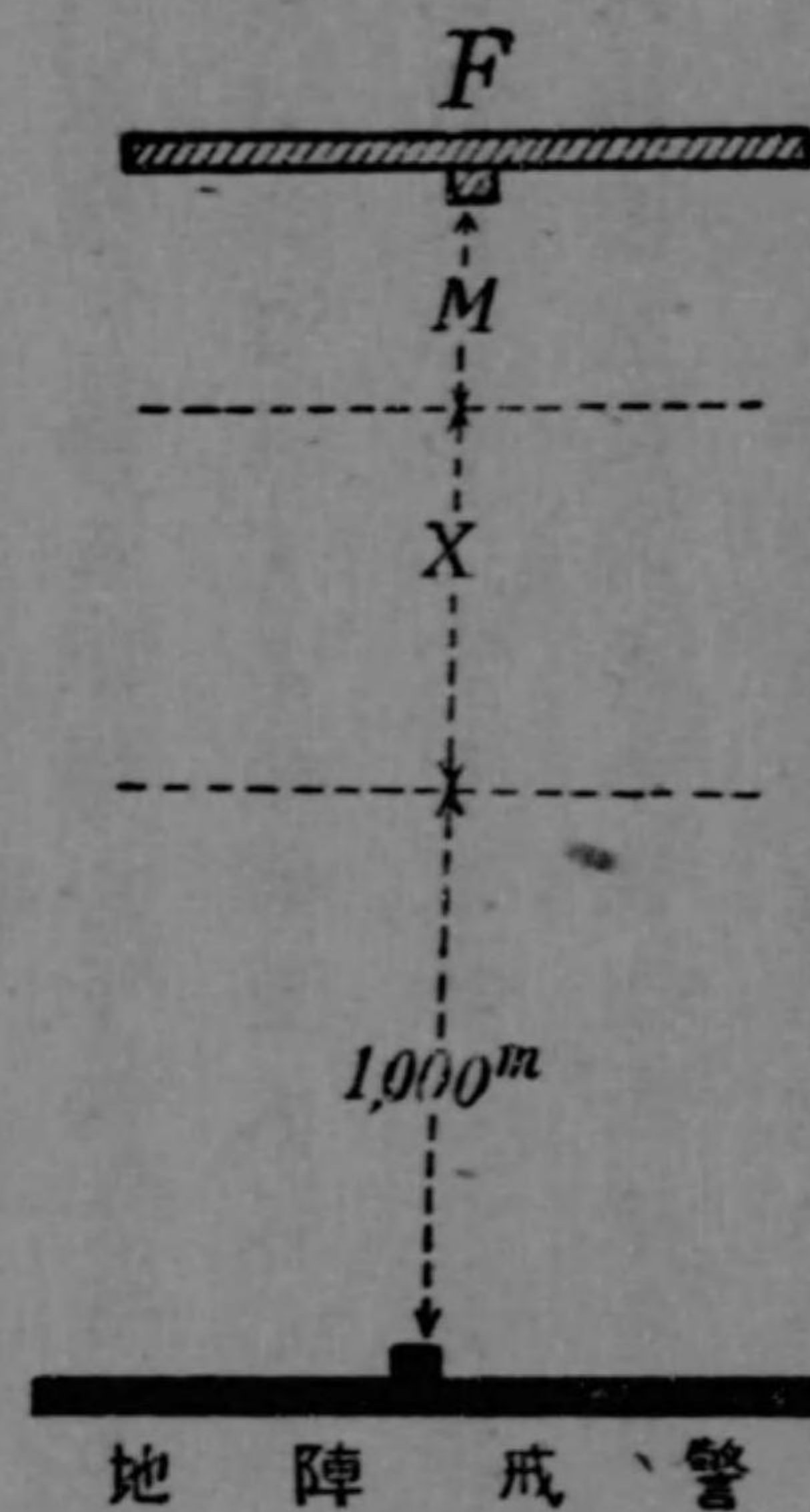
防禦の爲の前地の區分の趣旨は、火網編成を基礎とするよりも、自己部隊は何れの部分の敵に對して防禦に任ずべきやを明かならしむるを主旨とするを以て、的確且妥當なりとするのである。即ち各地區占領部隊は自己の戦闘地域内を攻撃し來る敵に對して専心防禦するのを本旨とするのである。

戦闘地域内に於ては又搜索及警戒の責任を有するのである。故に若し自己の戦闘地域内に於ける敵情に就て不明であつたり、又該地域内に於ける警戒不十分なる爲敵の奇襲を被るが如きことがあつたならば、地區占領部隊長の責任といはなければならぬのである。

右述の如き趣旨の下に戦闘地域を設定するのであるから、之を區劃するに方つては通常抵抗地帯の後端附近から警戒陣地の前方に互るべきは當然のことである。而して抵抗地帯の後端に就ては何等説明を要しないのであるけれども、戦闘地域境の前端を警戒陣地の前方何れまで延長すべきや、研究するを要するのである。抑、警戒陣地の前方に此の境界線を延長するの趣旨は、搜索の擔任を明ならしむるに在るのである。故に結論を得る爲には搜索範囲を何れにすべきや、は前方の地形に依つて異なるのであつて、一律に距離を以て定めることは出来ないものであるけれども、凡そ歩兵斥候を以て搜索し得べき距離には限度があるのである。故に此の搜索を遠くに及ぼすに従つて益、有利であるけれども、歩兵斥候を以て搜索し得る能力に鑑み最小限の要求を以て満足しなければならぬのである。然らば最小限の要求とは何んであるかといふに、此の搜索は警戒隊本來の任務たる敵の企

圖を察知すること固より必要であるけれども、之よりは寧ろ敵の奇襲を被らない様に警戒の爲の搜索を主としなければならぬのである。何となれば敵が攻撃部署を定めて攻撃準備位置に就くのは、通常我が警戒部隊を驅逐した後であるから、警戒部隊が最初の配置を以て現存して居る間に於ては、歩兵斥候を以てする搜索は餘程幸運の場合でなければ、敵の企圖を察知し得る様な有利なる情報を獲得することは、通常困難であるからである。果して然らば我が警戒陣地を攻撃せんとする敵が、不意に警戒陣地の前方大約千米内外に現出せしめざることを基準とすれば宜しいのである。今歩兵斥候が視察を以て搜索し得る距離を千米とすれば、警戒陣地の前方千米まで搜索を及ぼせば、敵が警戒陣地前千米に達するまでに、斥候の報告が警戒部隊に達することが出来るのである。併しながら地形上斥候の視察し得る距離が千米よりも短縮するに従つて、戦闘地域境の前端を警戒部隊の前方に延長する距離を大にしなければならぬのである。而して此の距離は次の式に依つて之を求めることが出来るのである。

今斥候搜索に於ける視察距離を五百米として、此の式に依つて戦闘地域境の前端を如何に延長すべきやを求むる一例を示せば次の如くである。



説明

- 1、Mは地形上斥候搜索に方り視察を許す距離
- 2、3、4は敵の前進速度と斥候が二分の一以上の速度を以て報告する速度との比である

$$\frac{500 + X}{1000 + X} = \frac{3}{4} \therefore X = 1000$$

故に斥候搜索の視察距離が五百米なるときは戦闘地境の前端は $1000 + 1000 = 2000$ 即ち警戒陣地の前方二杆の地線に達せしむるを要するのである。

満洲の如き平坦廣闊なる地形に在つては戦闘地境を劃定する爲補助となるべき地物を缺くことがある。斯る地形に於ては要すれば標識を設置する等の處置を講じて、戦闘地域の擔任を明ならしむべきである。併しながら此の標識を敵の爲に利用せられない様に注意を緊要とするのである。

(一七三) (一七二)

第六十九 警戒部隊ハ各地區毎ニ出シ敵情ヲ搜索シ且主陣地帯ヲ掩護スルモノトス時宜ニ依リ其ノ全部若クハ一部ヲ以テ敵ノ攻撃ヲ遲滞セシムル等前進陣地占領部隊ニ準ズル任務ヲ附課スルコトアリ

師團長ハ警戒部隊ノ占ムベキ陣地概略ノ位置ヲ示シ要スレバ兵力ヲ指定シ又其ノ動作ヲ統一ス而シテ警戒陣地ノ撤退特ニ其ノ時機ニ關シテハ豫メ明確ナル命令ヲ與フベシ
警戒陣地ハ我が砲兵ノ支援シ得ル距離ニ設ケ狀況ニ依リ機關銃ヲ以テ支援シ得ル距離ニ接近セシム而シテ成ルベク良好ニ遮蔽セラレ敵ノ搜索ヲ妨害シ我が搜索ノ據點タルニ適スル如ク選定スルヲ要ス
警戒部隊ノ兵力ハ狀況特ニ任務地形等ニ依リ異ナルモ勉メテ之ヲ小ナラシムルヲ可トス時トシテ警戒陣地ノ一部若クハ全部ヲ省略スルコトアリ
警戒部隊ノ配置ハ一定ノ形式ニ陥ルコトナク勉メテ之ヲ不規ニシ敵ノ搜索ヲ困難ナラシムルヲ有利トス

師團の警戒部隊は各地區毎に出すのを本則とするのである。是師團の如き廣正面を以て防禦する兵團に在つては、師團長直轄の警戒部隊を出すときは、編制上の各團隊の他に更に警戒部隊を指揮しなければならぬ弊を享受する害があるばかりでなく、各地區占領部隊は警戒部隊の報告に基き適時陣地に就き戦闘準備を整へる必要があるからである。

警戒部隊固有の任務は敵情を搜索し且主陣地帯を掩護するのである。警戒部隊の搜索の目的とするところは主陣地帯を占領する我が主力をして(主力とは歩兵主力ばかりでなく師團の主力を意味することは勿論である)敵の奇襲を被ること

なく、十分なる戦闘準備を整へて敵に對戦し得しむる様に機を失せず敵情を獲得すると共に第九十四に示されてある如く敵の攻撃に關する企圖を偵知するに在るのである。さて前條の説明に於て述べた如く、敵の奇襲を免るる爲には、斥候を頻繁に派遣するに於ては警戒部隊の主力は左程活動しなくつても、我が斥候が著しき過失なき限り、其の目的を達すること左程大なる困難でないのであるけれども、敵の攻撃に關する企圖を偵知する爲には單に斥候の搜索のみにては、其の目的を達することが出来ないのである。而して之が爲警戒部隊が如何に行動すべきやに關しては第九十四に於て詳述することにしやう。警戒部隊の他の一つの任務たる我が主陣地帯を掩護することは、上記搜索と相俟つて防禦の目的達成の爲緊要なることである。蓋し第一百六十一に明示してあるが如く防禦に在つては敵情就中其の企圖を速かに察知すると共に、我が企圖を秘匿すること極めて肝要であるからである。而して我が主陣地帯を掩蔽する爲には極力敵の搜索を妨害すれば以て足れりとするのであつて、之に關する詳細は後述することにする。警戒部隊の固有の任務は上記の如くであつて、別命なくとも警戒部隊を命ぜられたる以上は當然擔當しなければならぬのである。併しながら警戒部隊には此

等固有の任務の他に、時宜に依り其の全部若くは一部を以て敵の攻撃を遲滞せしむる等、前進陣地占領部隊に準ずる任務を附課することがある。前進陣地占領部隊に就ては後述する機會があるから茲には説明を省略する。要するに此の特別任務をも併せ警戒部隊に擔當せしむるは、地形上能く其の目的を達することが出来る様な場合でなければならぬ。而して特別任務を併せ課するに適する理想的地形は警戒陣地たるべき地線の前方に地障があつて、容易に敵の逼迫を受くる虞がなく、主陣地帯に於ける砲兵等より良く掩護を受け、且警戒陣地と主陣地帯との間に於ける地形も亦警戒部隊の退却を容易ならしむるが如きものをいふのである。而して警戒部隊が敵の行動を所要の時間だけ遲滞せしめば、夜に入ることが出来る狀況に於て、夜になつたならば適時退却せしむることが出来る様な場合に於ては、警戒陣地と主陣地帯との間に於ける地形は、退却の爲敵火に對して遮蔽せられなくとも、夜間の行動に支障がないことが重要なのである。各地區から出す警戒部隊の占むべき陣地を統制することなく、各地區占領部隊長の欲するところに委するに於ては、各警戒陣地の連繫を缺き、警戒に缺陷を生ずる害があるのである。而して假りに各警戒部隊の協同動作に依つて連繫を保持す

ることが出来るにしても、主陣地帯に於ける砲兵等より受くる協力に於て遺憾の點を生じたり、又師團長の欲する地線と一致を缺いたりすることがあるのは、免るべからざるところである。故に師團長は警戒部隊の占むべき陣地概略の位置は師團命令に於て之を統一するを要するのである。

警戒部隊の兵力は各地區の戦闘地域の廣狹、警戒陣地の地形、特別任務の有無等より判断して、地區占領部長が自ら之を決定すべきである。併しながら師團長に於て特に之を必要と認めたらば、所要地區より出す警戒部隊の兵力を示すべきである。而して特に之を必要とする場合とは例へば次の如くである。

1、敵の攻撃を遅滞せしむる爲警戒部隊固有の任務の他に特別の任務を附課する場合。

2、晝間だけは我が警戒陣地を本陣地の如く見せ敵を欺騙せんが爲、相當大なる兵力を以て之を占領せしめんとする場合。

3、敵が相當近接せる状況に於て警戒部隊をして前哨の任務を課し、其の掩護の下に夜間主力を陣地附近に於て休養せんとする場合。

警戒部隊は固有の任務に基き状況に應ずる如く適宜行動すべきであるけれども、

例へば次の如き場合に於ては所要に應じ各警戒部隊の動作を統一することがあるのである。

1、警戒部隊をして比較的靱強なる抵抗を爲さしめんとする場合。

2、前記兵力指定の場合の如き状況。

而して其の動作の統一の要領は一に状況に依るものである。然り而して警戒部隊は一方に於ては成るべく永く要點を保持して敵の搜索を妨害し、極力敵情を搜索するを要すると共に、他方に於ては敵より決戦を強ひられるに先ちて後退しななければならぬのである。然るに警戒部隊として其の任務に忠實ならんと欲せば、退却の時機を若干失することあるも、成るべく永く要點を保持して敵と觸接し若干の戦闘をも敢て辭せざるに至るは自然である。併しながら退却の時機を失して敵に捉はれ多大の損害を被る様なことがあつては、警戒部長の不覺といはなければならぬのである。故に退却の時機の看破は警戒部長として最も困難とし且苦痛とするところである。各地區占領部隊に其の責任を帯びしめた場合も亦同様である。加之各警戒部隊當面の状況は同一程度に進展しないことが少くないのであつて、従つて某地區より出したる警戒部隊當面の状況は既に退却

を必要とするに至つた時機に於ても、他の地區の警戒部隊當面の状況は未だ左程逼迫しない様な場合が屢起るのである。故に各警戒部隊撤退の時機を各地區占領部隊長又は警戒部隊長に委するときは、全般の状況上適當の時機に之を撤退せしむることが出来ない結果を生ずることが少くないのである。故に師團長は撤退の時機に關しては自ら責任を負ひ、全般の状況に鑑み撤退に關し豫め明確なる命令を與ふるを要するのである。

次に警戒陣地の位置に就て述べやう。該陣地は地形を不問に附するときは、我が砲兵の支援し得る限り成るべく前方に在らしむるを可とするのである。如何となれば我が企圖を秘匿する爲からいうても、將又敵の攻撃準備を成るべく遠くに於て行はしむる利益からいうても、成るべく前方に在らしむるを可とするからである。而して警戒陣地支援の爲全砲兵を暴露することの適當でないことは多言を要せざるところであつて、従つて成るべく小兵力の砲兵を以て而かも有効に警戒部隊を支援し得しめんが爲には火砲の威力を有効に發揮し得る距離に於ける地線に在らしむるを要するのである。今上述の要求に合する野砲の射程を六、七千米として警戒陣地の前方二、三千米を有効に射撃し得る爲には、警戒陣地は二乃

至三千米の距離に在らしむるを適當とするのである。併しながら敵の判断を困難ならしむる爲警戒陣地の配置を勉めて不規ならしむる様、機關銃を以て支援し得る距離に近接せしむることもあるのである。而して警戒陣地線が敵眼及敵火に暴露して居るときは、敵火の損害を被り到底永く陣地を保持して任務を遂行することが出来ないばかりでなく、我が警戒部隊を驅逐せんとする敵の行動を著しく容易ならしめるのである。故に警戒陣地は敵眼敵火に對して良好に遮蔽せらるることが肝要である。敵に對して比較的永く抵抗せんとする場合に於ては、彼此兵力の移動を行はなければならぬことがあるに於て益然りとするのである。警戒部隊は兵力に比して非常に廣き正面を占領しなければならぬから、據點或は各要點を占領することが肝要であつて、之に適應する良好なる地物の存在することは實に望ましいのである。蓋し僅少の兵力を廣正面に分散して而かも何等據點たるべき個所がないときは、有力なる敵の斥候の爲にも、警戒線は忽ち突破せられて、敵の搜索を妨害することが出来ないばかりでなく、我が搜索の據點たるに適する個所なきこととなるからである。

警戒部隊の兵力は状況特に左の諸件に依つて異なるものである。

1. 任務。

單に警戒部隊固有の任務を擔當するに過ぎない場合に於て、而かも輕易なる陣地の防禦に在つては、地形の許す限り任務を達成し得る最小限の兵力を以て満足すべきである。然るに前に述べた様に敵の攻撃を遲滞せしむる等前進陣地占領部隊に準ずる特別の任務を附課せらるる場合に於ては、其の兵力は當然増加せらるべきである。然り而して警戒部隊固有の任務を擔當する場合に在つても、堅固なる陣地の防禦に在つては其の兵力を増加せらるべきである。蓋し防者は常に唯一箇の主陣地帯に於て決戦を企圖するのであるから、堅固なる陣地の防禦であるからとて、警戒陣地の守兵を強大ならしむる必要はない様であるけれども、此の種防禦に於ては、敵をして成るべく多くの攻撃資材特に砲兵彈藥等を使用し盡さしむることが緊要であつて、之が爲には警戒陣地攻略の爲にも成るべく大なる戦闘力を失はしむる必要があるばかりでなく、其の防禦の時は永くなる關係上主陣地帯に於ける守兵及豫備隊等は適宜警戒部隊の掩護の下に休養する必要があるに依り、其の兵力を強大ならしむるを要するのである。

2. 地形。

警戒陣地の地形が其の兵力に關係するところ大なるものあるは、多言を要せずして明白である。即ち該陣地の地形が堅固であればある程警戒部隊の兵力を減少することが出来るけれども、否らざる場合に於ては、其の兵力を比較的大ならしむるのは已むを得るのである。併しながら警戒陣地が過度に堅固であつて、例へば通過點を稀に有する地障を前方に有するが如きものは僅少なる兵力を以て單に敵の攻撃を遲滞せしむる爲には好都合であるけれども、警戒部隊本來の任務を達成する爲には適當でないのである。何となれば河川防禦に於ける警戒部隊の如く敵をして我が状況を知らしめざると同時に、我も亦敵情を搜索することが困難であるからである。故に警戒陣地として適する範圍に於て成るべく堅固なるに於ては、能く其の兵力を節約することが出来るのである。警戒部隊の兵力を増減する素因は上述の如くであるけれども、常に服膺すべき原則は、如何なる場合に於ても勉めて其の兵力を小ならしむるを可とすること即ち是である。

茲に一言すべきは時として警戒陣地の一部若くは全部を省略することがあるこ

とである。本項は今次の改正に方り新に増補せられたのであるが、例へば敵を欺騙せんとするとき或は廣正面の防禦を爲す場合に於て適用せらるるのである。兎も角警戒部隊の配置は一定の形式に陥ることなく、勉めて之を不規にし敵の搜索を困難ならしむる様にするを有利とするのである。

赤軍野外教令第二百三十四に本條關聯事項として次の如く述べて居るが參考までに掲げて置く。

第二百三十四 陣地帯前方ニハ直接戰鬪警戒部隊ヲ配置ス其ノ任務ハ敵ノ奇襲ヲ豫防シ且其ノ搜索ヲ妨害スルニ在リ、戰鬪警戒部隊ハ原則トシテ強大ナル敵ト眞面目ナル戰鬪ニ陥ルヲ避クルヲ要ス、但高級指揮官敵ヲシテ陣地帯前線ノ經始ヲ誤認セシメンガ爲特ニ部署セル警戒部隊ハ之ヲ例外トス、此ノ場合ニ在リテハ當該警戒部隊長ハ之ニ關シ必要ノ命令ヲ受領シ對戰車資材ノ配置ヲ受クルノミナラズ主陣地帯砲兵ノ連絡班ヲ伴フヲ要ス、此等警戒部隊ノ撤退ハ強大ナル敵ノ壓迫ヲ受クル場合ニ限ルモノトシ而モ撤退ニ當リ敵ノ捕捉ヲ避ケ我ニ肩接シテ主陣地帯ニ闖入セントスル敵ノ急迫ヲ防止スル爲砲兵及機關銃ノ火力ヲ以テ掩護セララルヲ要ス

作戰要務令第二一部詳解 第三卷終

作戰要務令第二一部詳解(奥附)

定價金壹圓貳拾錢

昭和十四年八月二十五日印刷
昭和十四年八月三十一日發行

著者

成武堂 編集部

東京市麴町區三番町十四

發行兼印刷者

横尾 民藏

東京市牛込區市谷臺町二十二

印刷所

成武堂 印刷所

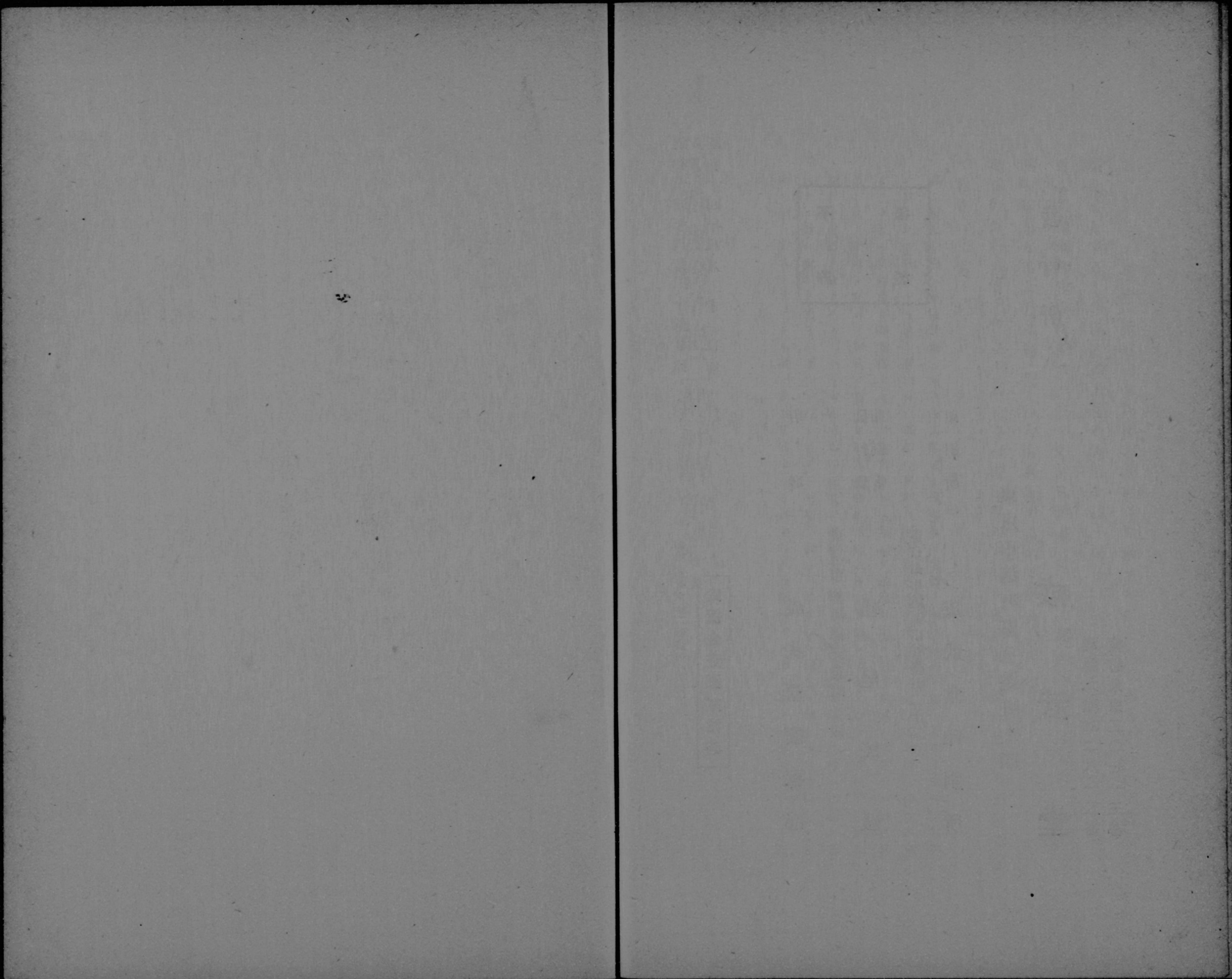


東京市麴町區三番町十四

發行所

成武堂

電話九段(33)二八一五番
振替東京三〇七一三番



772
54

